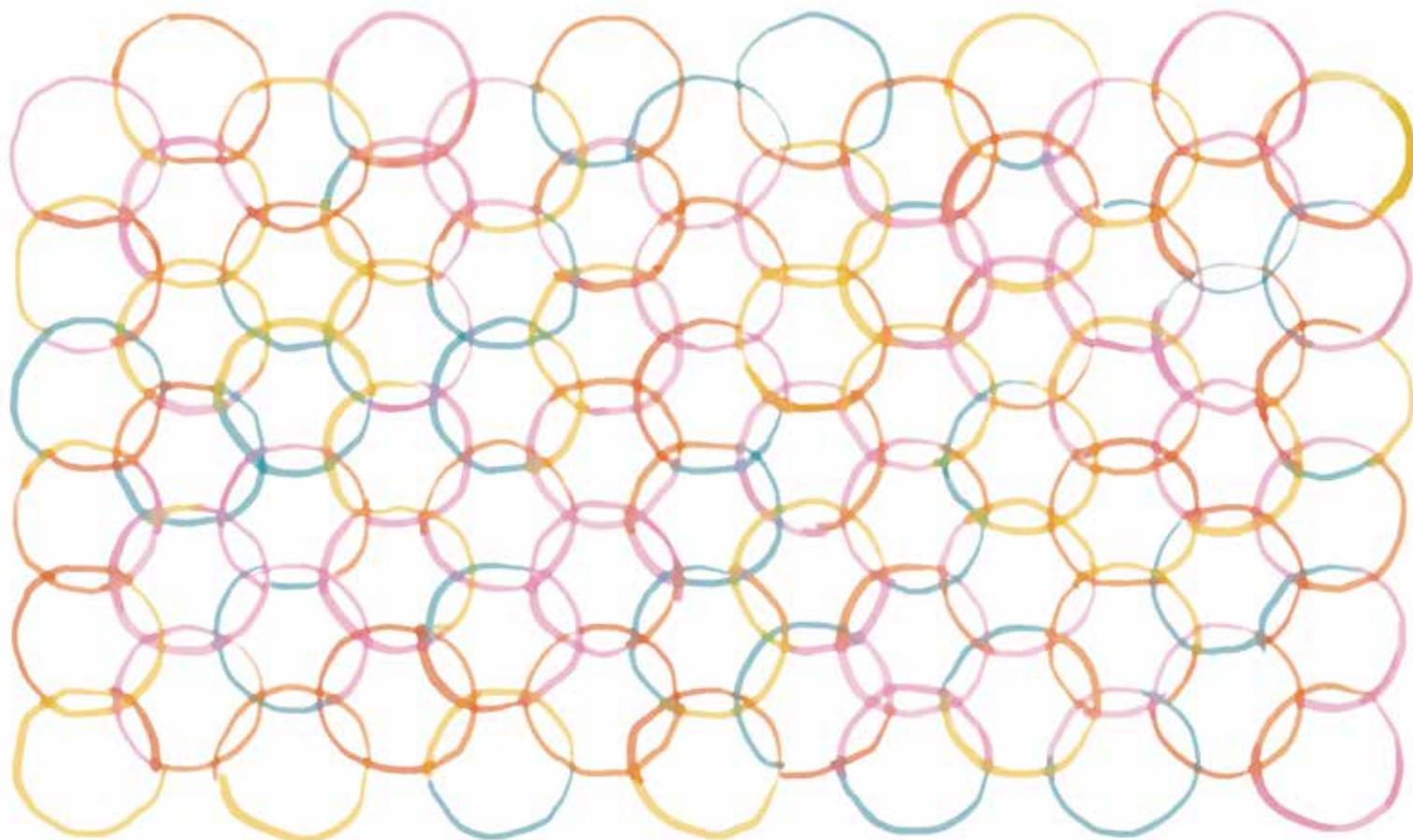


一般社団法人タウンスペース WAKWAK

「ただいま～と言える子どもの居場所づくり事業」

レポート [vol.3]



はじめに

- ただいま~と言える子どもの居場所づくり事業のはじまり -

虐待の中で本人の努力ではどうしようもない状況の中、目の前で涙を流す女の子の姿に突き動かされるように「ただいま~と言える子どもの居場所づくり事業」ははじまった。

「いま、彼女にとって家に居場所がないのだとすれば、それにかわる居場所を地域にどうしてもつくる必要がある。」
「居場所をつくる時には、大きな家族のように子どもたちが“ただいま~”と言っていつでも帰ってこられる場所で在れたら・・・」

社会福祉士として、同じ地域に生きる者として「自分には何ができるのか」、そう自問自答する中で、事業の立案が始まった。

一般的に事業を起こすときには「ヒト・モノ・カネ」が必要といわれる。彼女を目の前にしてその当時は、何も決まっていなかった。ただただ「目の前の彼女のためになんとかしなければいけない」という強い思いだけがあった。

その思いに突き動かされながら、企画書を書き、(公財)熊西地域振興財団さんが行われている助成金へとエントリーを行った。その後、採択となり財源が決まったことで思いは実現化へと一気に動いていった。

人生のめぐりあわせとは面白いもので、ちょうど助成金採択と同じタイミングで子どもソーシャルワークセンター代表の幸重忠孝さんからNHK全国放送の取材の受け入れのお話をいただいた。そこから2年間にわたってNHK全国放送の取材の受け入れが始まった。

新規事業の立ち上げにあたって、まず地縁組織から学校、行政、大学、企業など20団体を個別に回り、事業への理解や賛同を求め走りまわった。そして、地域関係者が集まる拡大会議を開き、子どもの居場所づくり立ち上げ講演会を開いた後、地域の諸団体の方々のお力をお借りしてオープニングイベントとして「わくわく食堂」を始めた。

その事業の様子は、2017年からNHK全国放送「課題解決ドキュメントふるさとグングン!ひとりぼっちのいない町 高槻富田地区」として2度にわたって放映され、その後、2021年には内閣府からのご依頼で政府広報「子どもたちの未来のために」でも放映され多くの反響をいただくこととなった。同時に、2024年には日本地域福祉学会が創設した「地域福祉優秀実践賞」、2025年には「スミセイ未来を強くする子育て大賞・内閣府特命担当大臣賞」もいただくこととなり、当地域での実践を他地域の課題解決にするべく、日々微力ながら発信させていただいている。

おかげさまで子どもの居場所づくり事業も11年目を迎え、地域の取り組みとしてすっかり根づきつつある。この間、子ども食堂には食材のご提供やご寄付など本当にたくさんの方々のご厚意をいただいている。

今回、子どもの居場所づくりのレポートは、平成31年度の「未来応援ネットワーク事業」、令和2年度の「子どもの未来応援基金『新型コロナウイルスの感染拡大への対応に伴う緊急支援事業』」、令和6年度同事業などを通じて行ってきた一連の取組を他地域の支援の参考とするべく経年でまとめた。

このレポートがこれまで当事業へご支援を頂いた、たくさんの方々へのご報告となること、この取り組みのひな形が他地域の課題解決の一助になることを切に願っている。

当事業にご支援頂いているすべての皆様へ感謝申し上げます。

「第三の居場所」を創造する

志水宏吉 大阪大学教授

大阪府高槻市富田地区。本冊子に出てくる活動が展開する場所。

そこはかつて、故池田寛先生(大阪大学教授)が自らの研究を鍛える「現場」として、深くかかわった町である。私も駆け出しの研究者であったころ、池田先生の導きのもとに何度も富田を訪れた。富田は、私にとって、師の一人と呼べる人との思い出の地である。

時代は下って2019年、本冊子の「はじめに」を執筆している岡本工介さんが大阪大学大学院に進学して、私の研究室のメンバーとなった。そして、富田と私のかかわりがリスタートした。同年、大阪大学人間科学研究科附属「未来共創センター」と本冊子で展開される事業の推進母体となる「一般社団法人タウンスペースWAKWAK」とは、OOS(大阪大学オムニサイト)協定なるものを締結した。それは、大学と大学外の諸アクターの協働活動を促進するための組織的枠組みである。私が大学教員として富田の町づくりにかかわり始めて、しばらくの時間が経ったことになる。その期間は、次ページの高田さんの文章で扱われている「コロナ禍」の時間と重なるものである。

「はじめに」にあるように、本事業のきっかけは、岡本さんと虐待に苦しむある女の子との出会いであった。名づけて「ただいま～と言える子どもの居場所づくり事業」。とても素敵なネーミングだと思う。家庭に居場所をつくりにくい子どもは、その子以外にもたくさんいるだろう。本事業の志は、そういう子どもたちのために、「地域のなかに居場所をつくりだそう」ということである。「ただいま～」と言える場所が、地域のなかにあること。素晴らしいことではないか。

私はこれまで、学校社会学という領域で学問・仕事をしてきた。「学校に通い、そこで学ぶことが、すべての子どもたちにとって、そして社会の側にとってもかけがえのない価値と意味をもつ、そんな学校にしたい」という思いで研究に打ち込んできた。「不登校の子をゼロにする」のが、私の理想である。端的に言うなら、すべての子どもが「ただいま～」と言える学級・学校を日本中につくりたいのである。

しかし、「ただいま」と言える場所は、何も「家庭」の、あるいは「学校」の専売特許ではない。富田の子ども食堂(ただいま食堂)や学習支援教室(わんびーす)を訪問してみると、そのあたたかな、やさしい雰囲気にはっとした気持ちになる。「第三の居場所」という言葉を使ってよいかもしれない。「ただいま」と言える場所を他に見つけにくい子どもの居場所になること、家庭ではうまくやっているが、学校にはなじめない子どもたちの2つめの居場所となること、そして家庭と学校で問題なく生活している子どもたちの3つめの居場所となること。いずれにも開かれたオープンかつフランクな人間関係を結べる場所づくりを、さらに追究していただきたい。

本冊子で展開されている富田の居場所づくりの試みは、同様の課題をかかえた全国すべての地域にとっても参考になるものに違いない。その挑戦的な試みをまちかで見続けることができるのは、私にとっての大きな幸運である。

自助というまやかしーコロナ禍のもとで考えたことー

高田一宏 大阪大学教授

2020年度は、「コロナ禍」に明けて「コロナ禍」に暮れた一年だった。学校は春先に突然に休校。6月には再開したものの、夏休みや冬休みの短縮、行事等の延期・中止・規模の縮小など、例年にはない対応を迫られた。「タウンスペースWAKWAK」が取り組んできた子ども食堂(「わくわく食堂」「ただいま食堂」)や学習支援(わんぴーす)も、活動形態を変えたり一時的に休止したりしなければならなかった。

ただ、悪いことばかりでもなかった。コロナ禍のもとでの困惑、混乱、試行錯誤は、結果的にはあるが、福祉や教育、さらには地域のあり方を見なおすきっかけになった。ここでは、「自助・共助・公助」をキーワードにして、コロナ禍が私たちに何を問いかけているのか、考えてみたい。

「自助・共助・公助」は、菅首相が自民党総裁選出馬の際に、社会政策の理念として語った言葉である。私が注目したいのは、三つの「助」の優先順位である。菅首相はこう言った。まずは自分で努力し、家族・親族や地域の人とも助け合ってください。それでもうまくいかないときは公=政府のセーフティネットがありますよ、と。

いっけん、正論だが、何かおかしい。そう思う人は多いだろう。でも、何がどうおかしいのかをきちんと説明するのは意外にむずかしい。それは、私たちが「自助」を批判的に捉えることができないでいるからである。

コロナ禍の中で、人々の暮らしに必要な不可欠な仕事に携わる「エッセンシャルワーカー」の苦境が明らかになった。食料生産、交通、流通、販売、医療、保健、子どもの保育や教育、高齢者のケア……。エッセンシャルな仕事の担い手のなかには、女性、外国人、非正規雇用者など、社会的に不利な立場にある人が少なくない。コロナ禍の直撃を受けたのはそうした人々である。

「エッセンシャルワーカー」は、社会という建物の「縁の下の力持ち」である。けれども、少なからぬ人々が「縁の下の力持ち」を忘れ、自助を語っている。私はそのことに違和感を抱くようになった。端的に言えば、自助を口にする人は、エッセンシャルな仕事を他人に押しつけていることに無自覚な、特権意識なき特権層である。

昔ながらの地縁・血縁にもとづく共助の仕組みは揺らいでいるし、そうした「縁」は、時に閉鎖性や差別性をともなう。かつて公助の担い手だった政府はもはやあてにはならない。「自助を最優先に」という主張にうなずく人が多いことにはそれ相応の理由がある。だがこの主張は事実誤認にもとづく空論である。それは、すべての人は誰かに助けられて生きているからだ。人は相互依存の関係の中でしか生きられないからだ。

「タウンスペースWAKWAK」がやってきたのは、地域福祉や地域教育の活動を通じた相互依存の仕組み作りだったのではないか。住民ボランティア、企業、大学など、地域活動の新たな担い手を増やしてきたのも、「お上」によるものとは異なる公助の仕組みを作ろうとしているからではないか。コロナ禍の中で、私はそんなふうを考えるようになったのである。

特権にあぐらをかく人がいない、人々が助け合いながら暮らす地域。自助というまやかしから自由になり、そういう地域を思い描いてみようではないか。

もくじ

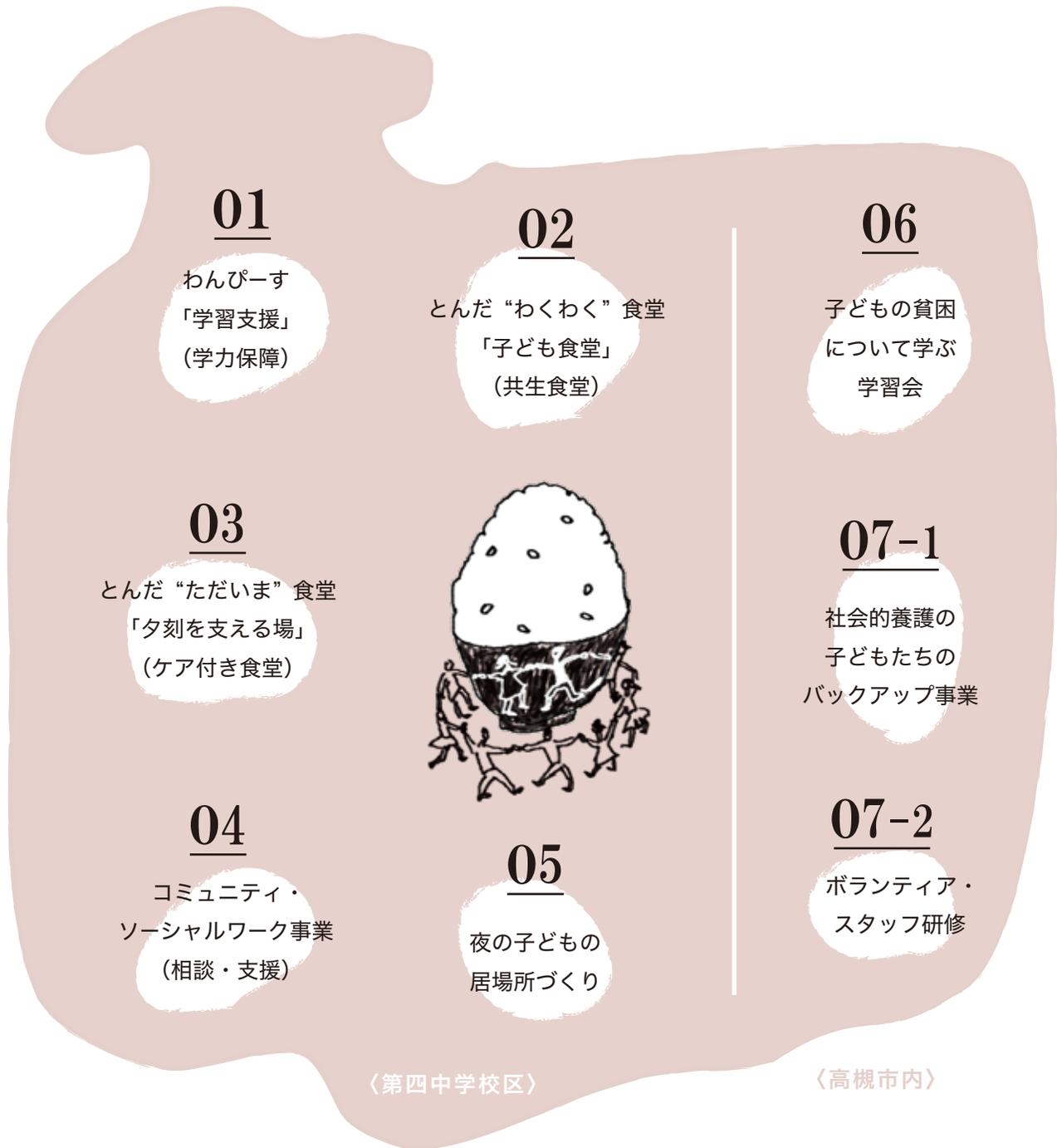
はじめに		1
プロローグ	この取組の価値	2
もくじ		4
導入	タウンスペース WAKWAK の子どもの居場所事業	5
事業紹介	01 『学習支援事業わんぴーす』	6
	02 『とんだ“わくわく”食堂(子ども食堂)』	7
	03 『とんだ“ただいま”食堂(子ども食堂)』	8
	04 『コミュニティ・ソーシャルワーク事業』	9
	05 『夜の子どもの居場所づくり事業』	10
	06 『子どもの貧困や子どもの居場所の必要性について学ぶ学習会』	11
	07-1 『社会的養護の子どもたちのバックアップ事業』	12
	07-2 『ボランティア・スタッフ研修』	13
特集	「新型コロナ禍緊急支援プロジェクト」実践報告	14
	全国の支援のフロントランナーをめざす	19
	地域から広がる第三の居場所講演会を開催	20
	地域から広がる第三の居場所アクションネットワーク	22
	小地域の包括支援のネットワークづくり	25
	アクションネットワーク事務局主導の取組み	26
	企業との協働による食支援のしくみづくり	30
	第三の居場所応援キャンペーン	32
	議員さんとの連携に向けて	35
	地域から広がる第三の居場所 実践報告会	38
	高槻子ども食堂アンケート 2024 調査研究報告	39
	法人紹介 - タウンスペース WAKWAK	43
協働事例	1 地域との協働 まちづくりに住民の力を活かす	46
	2 大学との協働 まちづくりに大学生の力を活かす	47
	3 地元学校園 「ゆめみらい学園」との協働	48
	4 企業との協働 「SDG s」パートナーシップの実践	49
トピックス-1	マスメディアでの紹介 NHK 総合TV「課題解決ドキュメント」	50
トピックス-5	全国に発信し他地域の課題解決の一助に	56
支援の呼びかけ		60
ご支援いただいたみなさま		62
代表理事メッセージ		64
あとがき		65
法人沿革		66

今レポートでは当法人の多岐にわたる事業の中で「ただいま～と言える子どもの居場所づくり事業」を紹介します。

事業紹介 地域・家庭・学校・行政・大学・企業と連携しながら ただいま～と言える子どもたちの居場所をつくる事業

タウンスペース WAKWAK の

子どもの居場所づくり事業

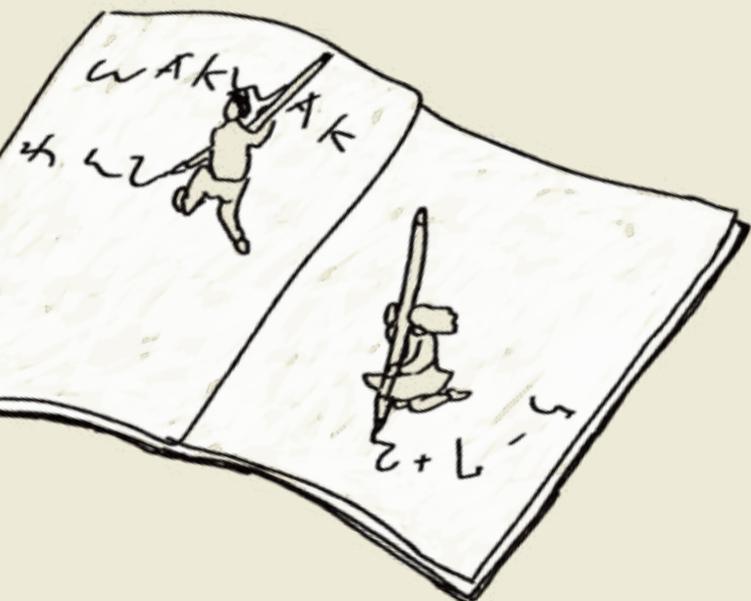


新型コロナ禍、社会的不利を抱える子ども等の状況を目のあたりにし、高槻市全体に支援を拡大

01 『学習支援事業わんぴーす』

2014年からはじまった学習支援。学校教員を退職されたベテランの先生と、将来学校の教員や保育士・福祉関係を目指す学生さんが講師となり行っています。

- 通年開催 毎週月・水曜日の午後7時～9時
- 場所：高槻市立富田ふれあい文化センター
- 対象：高槻市立第四中校区の中学生
- 実績：これまで540回開催、のべ9,180人が参加（2025年3月現在）



02 『とんだ“わくわく”食堂(子ども食堂)』

共生食堂をコンセプトに「地域に住む多世代、子どもから高齢者まで多くの人たちがごちゃまぜに交わる交流拠点」として富田ふれあい文化センター・富寿栄公園にて2017年度から年に2回開催。

○日時：2月・8月の年に2回

○場所：高槻市立富田ふれあい文化センター・社会福祉法人つながり「サニースポット」・富寿栄公園

○対象：子どもから高齢者までどなたでも

○実績：これまで7回開催、のべ6,600人が参加(2025年3月現在)



2019年2月23日(土)に開催した取り組みでは、舞台発表として第四中学校区の小・中学校の発表のほか、歯科衛生士さんによる親子で学ぶお口の健康のお話や人形劇「TOA 音のシアター」の鑑賞。各コーナーでは、元富田保育所保育士さんによる親子遊びや大阪ガス(株)提供による古代の火おこし体験などを設置。のべ1,260名の参加がありました。

セクター	わくわく食堂の協働団体等一覧
地域	地元自治会、民生委員児童委員、高槻市社会福祉協議会、社会福祉法人つながり、ボランティアグループひまわり、富田赤大路地域人権教育推進委員会、富田保育所の元保育士さん、風の子文庫、手話サークルトライアングル、歯科衛生士さん
NPO等	認定NPO法人ふーどばんく OSAKA、NPO法人つむぎの家、NPO法人ニュースタート事務局関西、NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ・東京おもちゃ美術館・(公財)熊西地域振興財団
大学	大阪人間科学大学、平安女学院大学、関西大学、常磐会短期大学、桃山学院大学、大阪大学、大阪大学人間科学研究科附属「未来共創センター」
行政	高槻市立富田ふれあい文化センター
企業	サンスター株式会社、阪急阪神ホールディングスグループ株式会社、大阪ガス株式会社、TOA株式会社、丸大食品株式会社、高槻地区人権推進員企業連絡会、吉本興業株式会社等
学校	高槻市立第四中学校・高槻市立赤大路小学校・高槻市立富田小学校 公教育の総合学習の時間に地域の様々な人から聞き取りを行い、子どもたち自らが「まちの温度計をあげる」取り組みとして地域に参画(社会参画)。その授業の実践発表や食堂当日の運営を担っています。

03 『とんだ“ただいま”食堂（子ども食堂）』

ケア付き食堂がコンセプト。「一緒に食卓を囲むことを通じてつくられた信頼関係をもとに、家族のこと、学校のこと、進路のことといった子どもの生活課題への対応を目指す」を目的に2017年度より開催。こちらは少人数(10名程度)の子どもたちを対象に家庭的な場を大切にしています。

- 通年開催 毎週水曜日 午後5時半～7時
- 場所：高槻市立富田ふれあい文化センター
- 対象：高槻市立第四中学校区の小中学生
- 実績：これまで126回開催、のべ1,890人が参加（2025年3月現在）



キッチンスタッフさんが毎回趣向を凝らし、メニューを考えてくれています。



クリスマス、ハロウィン、鍋など四季折々のイベントも大切にしています。

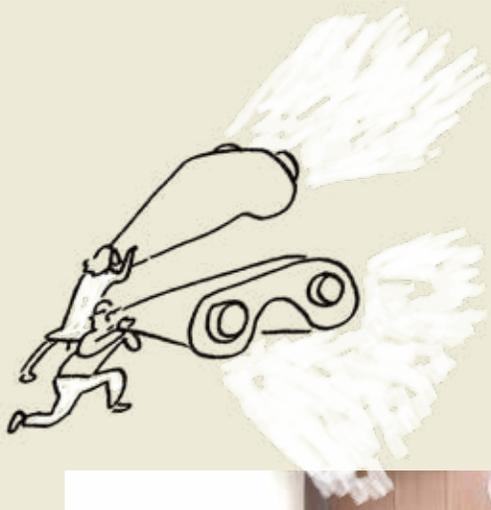


食材のご提供・ご寄付に感謝いたします。

「旬のものを食べてほしい!」「この場のために作付けをがんばってるよ。」などなど、この間、ただいま食堂に、タケノコや梨、お米やじゃがいも、たまねぎなど、市内外、他府県からもたくさんの方々から食材のご提供をいただいています。また、運営のために現金のご寄付もいただいています。皆様のご厚意に感謝申し上げます。

04 『コミュニティ・ソーシャルワーク事業』

○学校等との連携会議：学習支援やただいま食堂では、学校等と2～3か月に一回のペースで定期的に連携会議を開催しています。



○ケースカンファレンス：個別での支援が必要な際には、地域・家庭・学校・行政等関係機関との連携による支援も行っています。

「学び」や「食」の支援を通して見えてくる様々な課題を発見・他機関が連携して相談・支援することで子どもたちの育ちを支えています。



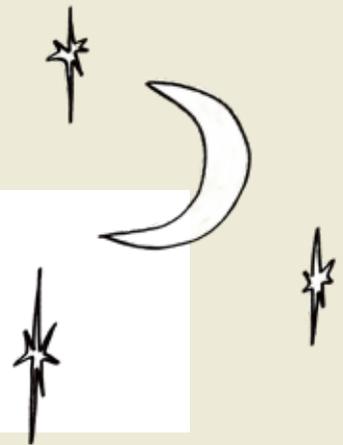
○中3生勉強合宿

学習支援では、受験生である中3生を対象に合宿を開催。市北部榎田地区の民家をお借りし、勉強、農作業体験、バーベキューなどなど様々な体験をしています。



05 『夜の子どもの居場所づくり事業』

- 日時：随時
- 場所：非公表
- 対象：中高生



学習支援事業、子ども食堂の取り組みの中で見えてきた課題をもとに当法人、地域関係者、社福つながり、学校関係者を中心に地域貢献プロジェクトを発足。2018年度独立行政法人福祉医療機構(WAM)の助成をうけ、先進地への視察や検討会を通じて富田版の夜の子どもの居場所について整備を行いました。

WAM 助成プロジェクトの様子ピックアップ

「西成子どもの里」見学会を実施

2018年6月16日に「夜の子どもたちの居場所づくりプロジェクト」で大阪市西成区にある「こどもの里」を視察見学しました。参加したメンバーは、プロジェクトに参加するWAKWAKスタッフをはじめとする福祉、学校関係者約15名。

1977年から西成区釜ヶ崎で様々な厳しい環境に置かれた子どもたちへの支援、居場所づくりを行っている実践を学びました。



富田版子どもの居場所検討会

見学会に続いて、富田版子どもの居場所のあり方の検討会を開催。

NPO 法人子どもセンターぬっく理事長で弁護士の森本志磨子先生等をお招きし、実際に居場所を運営するにあたっての手続き方法や法律(親権等)について学びました。



06 『子どもの貧困や子どもの居場所の

必要性について学ぶ学習会』

この数年「子どもの貧困」や「子どもの居場所の必要性」についての地域内外の理解のすそ野を広げるために学習会を開催しています。

これまでに桃山学院大学准教授の金澤ますみさん、NPO 法人子どもソーシャルワークセンター代表幸重忠孝さん、認定NPO法人西成子どもの里理事長荘保共子さん、NPO 法人西淀川子どもセンター前代表西川日奈子さん、NPO 法人子どもセンターぬっく理事長(弁護士)森本志磨子さんを講師としてお招きし、地域住民、学校関係者を対象に講座を行ってきました。

講座の様子ピックアップ



地域から広がる子どもの第三の居場所

- 高槻市民協働プラザ主催 WAKWAK が共催 -

高槻市市民公益活動サポートセンター（協働プラザ）が主催、タウンスペース WAKWAK 共催、平安女学院大学高槻の子ども食堂研究班の協力で 2019 年 12 月 14 日(土)午後 1 時から高槻市生涯学習センターで市民向け講座を開催。

一部では「子ども食堂増加の背景にある子どもの貧困・第 3 の居場所の必要性」についてタウンスペース WAKWAK 岡本工介事務局長が基調講演。

引き続き、平安女学院大学調査研究班から「高槻市の子ども食堂の現状と課題」について調査結果を報告いただきました。

二部は原純子(国立成育医療研究センターアレルギーセンター研究補助)さんをコーディネーターに招き「富

田ただいま食堂」はじめ「川添子ども食堂」「ひなたぼっこ子ども食堂」「NALK 花みずき子ども食堂」高槻の子ども食堂運営者 4 団体も加えてトークセッションが行われました。



07-1 『社会的養護の子どもたちのバックアップ事業』

2010年度から、① 児童養護施設の子どもたちを対象にした自然体験活動と② ボランティア・スタッフ研修の2つの柱で事業を行っています。

自然体験活動では虐待やひとり親、障がい等の社会的、経済的事由により児童養護施設で暮らす子ども達を対象にして、生きる力や自己肯定感を育むことを目的にしています。

- 日時：主に秋から冬にかけて2回開催
- 場所：高槻市立摂津峡青少年キャンプ場
- 対象：児童養護施設に入所している子どもたち（就学前から小学生）
- 実績：これまで19回開催、のべ290人が参加（2025年3月現在）※前身の取り組みを含む

社会的養護とは？

社会的養護とは、保護者のない児童や、保護者に監護させることが適当でない児童を、公的責任で社会的に養育し、保護するとともに、養育に大きな困難を抱える家庭への支援を行うことです。

社会的養護は、「子どもの最善の利益のために」と「社会全体で子どもを育む」を理念として行われています。

(厚労省のページより)



07-2 『ボランティア・スタッフ研修』

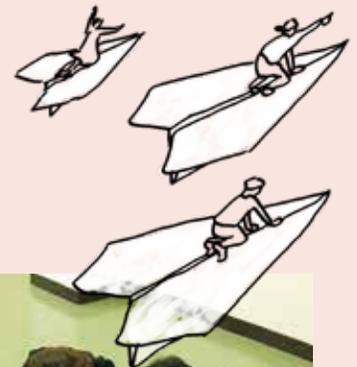
将来、教育現場や福祉関係などの対人援助職を目指す学生を対象に、研修や実践を通して子どもたちの背景にある虐待等の課題の理解やエンパワメントを支援する実践力を育むことを目的としています。

- 日時：主に秋から冬にかけて4回開催
- 場所：高槻市立富田ふれあい文化センター
- 対象：将来、教育現場や福祉関係などの対人援助職を目指す学生等
- 実績：これまで56回開催、のべ172人が参加（2025年3月現在）※前身の取り組みを含む



受け入れ先の児童養護施設の広報誌に以下のように紹介いただきました。

自然と気持ちが甘えられ自分を表現している子どもたちの様子が印象的でした。
 スタッフのみならず安心感や信頼感を表現できたこと、施設の中だけでなく、一步学園を出た場所で表現できたことは継続と変わらぬ受け皿の取り組みの成果があらわなことです。



特集「新型コロナ禍緊急支援プロジェクト」実践報告

townspace WAKWAK 業務執行理事兼事務局長
岡本 工介

ここでは、新型コロナ禍に緊急支援対策として実施した子どもの居場所づくり事業について、(一社)部落解放・人権研究所発行、月間『ヒューマンライツ』389号(2020年8月)に投稿した実践報告(加筆修正)を掲載、紹介します。

はじめに

「子ども食堂9割休止、半数は食糧配付に移行」

これは、昨今爆発的な増加を見せ子どもの居場所の一つとして注目されている子ども食堂の新型コロナ禍の現状。

NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ(理事長湯浅誠さん)によれば2020年4月に全国調査をしたところ、回答した231カ所の9割に当たる208カ所が食堂を休止し、うち約半数の107カ所は弁当や食材の配付・宅配に切り替えていることが分かった。

同調査では、「子ども食堂での困りごと」の第1位として「会場が使用できない」があがっており、「いま、必要な支援」として「配付・開催の会場」に続き「困窮者、子育て世帯などへの支援」「心のケア、相談できる場所」が上がっている。そこから、新型コロナウイルスの拡大により日々子どもたちが集まる居場所が失われ、それと同時に、「生活困難層」も増加する中でまったなしの支援の必要性が浮かび上がってくる。

townspace WAKWAK(以下WAKWAK)には、そのような状況下で日々子どもたち、家庭や学校、関係機関から電話や事務所への直接の相談、LINEやメールなど様々な媒体を通して数多くのSOSが入ってきていた。

そのような状況下、「むすびえ基金」(NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ主催)の助成を受けこれまでの実践を通して培ってきた多セクターとの連携の中で「新型コロナ禍子どもの居場所緊急支援プロジェクト」を立ち上げ実施することとなった。



社会的弱者を見捨てないまちづくり 法人の概要と従来の事業

タウンスペースWAKWAKは一般社団法人として2012年4月に設立された。

活動の中心的フィールドとなる高槻市富田地域は約650世帯の被差別地域を含み、部落解放運動が存在する地域でもある。

設立にあたって「すべての人に居場所と出番がある社会」「すべての人がSOSを発信でき、互いに支え・支えられる社会」「新しい公共の主体としての自立・参加・協働による地域社会の再生とつながりのある社会」を理念として掲げている。

地域には様々な課題が存在する。とりわけ、被差別地区にはより明確に様々な社会的矛盾が現れている。WAKWAKは、それらの課題に対し、地域・家庭・学校・行政・大学・企業など様々なセクターとの協働によって社会課題の解決を図ることを目指している。言い換えるなら、長年にわたる差別解消の取り組みにより生み出されてきた社会的弱者を支えるネットワーク、その資源を最大限に活かしながらまちづくりに取り組んでいる。

新型コロナ禍に起こる様々な課題

WAKWAKでは、中学校区を対象に子どもから高齢者までを支える仕組みとして多岐にわたる活動を行っている。中でも子どもの居場所づくり事業においては、主に学習支援事業と2つの形態の子ども食堂を行っている。2014年から「生活困窮家庭等さまざまな課題をもつ子どもたちの学習支援事業」、2017年からは「地域に住む多世代、子どもから高齢者まで多くの人たちがごちゃまぜに交わる交流拠点」として誰もが参加できる共生子ども食堂（富田わくわく食堂）と「一緒に食卓



を囲むことを通じてつくられた信頼関係をもとに、家族のこと、学校のこと、進路のことといった子どもたちの生活課題への対応をめざす」ことを目的にしたケア付き子ども食堂（富田ただいま食堂）という2つの形態の子ども食堂をはじめた。また、学びと食の支援を通して見える子どもたちの生活課題を発見し、学校や公的機関と連携して相談、支援につなぐコミュニティ・ソーシャルワーク事業を展開してきた。

しかしながら、2019年度の新型コロナウイルスの流行の影響を受け、下半期事業はいずれも中止せざるを得ない状況が続いていた。また、事業の受講料の減収、このような事業を支えるための収益事業の柱の一つである講師派遣・視察の受け入れ事業も軒並み中止となり、法人本体の財政面でも大きなダメージを受けた。

事業の実施ができないことにより、①「変わらずにあり続けること」を最も大切にしている子どもたちの居場所が

ストップし、支援が止まってしまうこと、②法人本体への財政面でのダメージによる居場所づくりの運営の危機のダブルパンチが起きていた。この状況は日本各地の数多くのNPOにも起きていた。

この活動では、子どもたちの課題を発見し、地域と学校が連携して解決することを日々行っているが、新型コロナ禍で学校は休校、子ども食堂などの居場所もストップしたことで、日々子どもたちの直接の様子からケースを発見することがそもそも困難に陥った。これらのことは、学校や地域の子ども食堂などの社会資源がいかに子どもたちにとってのセーフティネットの役割を果たしているのかということに改めて教えられる出来事でもあった。

新型コロナ禍、接触が自粛される中、それまでの事業を通して「顔の見える関係性」があったことから、日々子どもたち、家庭や学校、関係機関から電話や事務所への直接の相談、LINEやメールなど様々な媒体を通して数多くのSOSが入ってきていた。

「一日の食事を一食以下で過ごしている状況。」「生活リズムが昼夜逆転となっている状況」「国による制度（定額給付金や持続化給付金等）の申請の仕方が分からずに困っている状況」「そもそもパソコンが使えないので申請ができない状況」「虐待が深刻化している状況」など、社会的不利を抱える人たち（子どもたち）ほど、より顕著に深刻化する状況が生まれていた。

「災害時には、社会的不利を抱える人たちほど孤立化が、より深刻化する」という2018年の大阪北部地震後の災害支援から学んだことの教訓と同様のことが今回の新型コロナ禍でも起こっていた。

「Stay Home」が口々に言われ、企業ではテレワークが実施される中、「困っている人をさらに困らせるわけにはいかない。」と地域のセーフティネットの拠点として「SOSを見捨てない」という法人の姿勢を貫くため事務所にはスタッフが常駐しその対応にあたっていた。

「食・学び・心のケア・制度への伴走型支援」を一体的に実施

そのような状況下で緊急支援プロジェクトを構想、「むすびえ基金」による助成と、「新型コロナ禍で困っている子どもたちにぜひ使って欲しい」という個人の方からの善意のご寄付を受け5つの柱でプロジェクトをスタートした。

① 食の支援：フードパントリー型富田ただいま食堂の開催

毎週水曜日に高槻市立富田ふれあい文化センターを会場に行っていた「ただいま食堂」。会場が閉館となったため地元のカフェ「M'scave」によるお弁当・同じく地元のパン屋「花パン」による食パンを弁当配付型で実施。ここでは、「週に1度ご飯をつくらずゆっくりと過ごす時間を提供できれば」という思いとパンも配布することで「1日1食の状況の子どもたちが次の日の朝食や昼食に食べられるように」という思いを込めた。食材提供においては、ふーどばんく OSAKA、ダイエー



のフードドライブ、丸大食品(株)の食材提供、個人の方からの食材提供などたくさんのご支援をいただいている。

② 学びの支援：オンライン学習支援わんぴーすの開催

同じく毎週月・水で行ってきた学習支援については、学校教員のOB/OGさん、大学生の力をお借りしオンライン（ZOOM）対面授業を実施。コロナ禍の家庭教育力の差が学力の著しい格差につながらないようにオンラインでの対面により勉強のつまずきを確認しながら個別マンツーマン体制で支援した。また、併せて事務所を媒介に日々の学びの積み重ねをするために週3で学習プリントの添削を実施した。



③ 制度への伴走支援・心のケア

地域の団体と協働し、特別定額給付金等制度の申請手続きが困難である要援護家庭への伴走型支援をするため2020世帯にルビ付きのちらしとマスクを配布し、手続きの支援を行った。これは、「制度が最も必要な人に最も届かない状況が生まれる可能性がある」というこれまでの経験をもとに実施した。



④ 緊急時生活支援

こちらは当初の予定にはなかったものの、近隣の高校やふーどばんく OSAKA 等から緊急性の高いケースが入っており、その声に応える形で緊急時生活支援として随時、弁当や食品の提供を行った。

⑤ 支援のひな形の普及

これら地域・家庭・学校・行政・大学・企業等多セクターとの協働で創る支援のひな形をレポート作成・書籍・論文投稿などを通して長期化するであろう新型コロナ禍「新生活様式」における新たな支援方法の普及を図ることを構想した。

これらの事業は当初5月から6月末までを予定していた。しかし実践を行う中、今日をしのぐための食事が無いという切実な状況、新型コロナが収束したあとに様々な課題が可視

化されていく中で、子どもの未来応援基金を受け実施することを決めた。

おわりに

「この校区に来てほんとに良かった。」

「地域でも、学校でもいろんな人に助けられてこの校区に来てほんと良かった。」

これは、弁当の受け取りに来られた保護者の方が言ってくださった言葉。

被差別部落を拠点にまちづくりを行う私たちにとって、もともと住んでいる方々はもちろん、引っ越しをされてきた方々がこのように地域に対して安心感や愛着を持ってもらえることは本当にうれしいことであり励みになる言葉。

私たちの目指すまちづくりは長年の差別の結果という影の後ろにある「社会的弱者を多セクターとの連携の中で支えてきたまち」という光の物語を活かしたまちづくり。

新型コロナ禍の今だからこそ、社会的弱者を含めた「誰一人取り残さないまち」を目指していきたい。

全国の支援のフロントランナーをめざす

- 居場所の包括連携による全国のモデル地域づくりへチャレンジ -



私たちはこれまで中学校区を対象に支援のひな型を創り、それを全国に広げ他地域の課題解決の一助になることを願い微力ながら活動してまいりました。

しかし、2020年に新型コロナウイルスの感染が拡大。緊急支援プロジェクトを行う中で社会的不利を抱える子どもや家庭がより一層不利に置かれている現状を目の当たりにしてきました。そのことから2021年度法人のコンセプトも対象範囲も体制もすべて組み換え、市域広域事業へと着手しました。

私たちがめざすのはこれからみなさんと創る取り組みを全国モデルとして発信し全国の支援のフロントランナーとなることです。

新たなチャレンジへと踏み出す当法人へぜひ継続したご支援はもとより新たなご支援をよろしくお願い申し上げます。

「地域から広がる第三の居場所講演会・シンポジウム」を開催

2021年10月ネットワークの立ち上げのスタートに合わせ「地域から広がる第三の居場所-新型コロナ禍の子どもたち」講演会・シンポジウムを高槻現代劇場で開催しました。

講演会は社会活動家の湯浅誠さんをお迎えしてタウンスペースWAKWAKと高槻市民公益活動サポートセンター共催で開催。

感染拡大防止対策も行いながら会場とオンライン（YouTube同時配信）併用での開催。会場出席者は約122名、オンライン参加は30名を超えるたくさんの方にご参加いただきました。またご来賓として濱田剛史市長、吉田忠則市議会議長もお越しいただきました。ありがとうございました。



● 第1部 地域から広がる第三の居場所 講演会



対面・オンライン併用 で152名が参加



● 第2部 市内活動団体によるシンポジウム

第二部は湯浅誠さんに加え、国立成育医療研究センターの原純子さんにコーディネーターを務めていただいて活動団体によるトークセッション。

パネラーとして高槻市内で「子どもの第三の居場所」を運営している川添子ども食堂・海老ヶ瀬正三さん、ひなたぼっこ子ども食堂・中村亜希子さん、ナルク高槻島本・田中千鶴子さん、高槻つばめ学習会・茶山敬子さん、そしてタウンスペースWAKWAK・岡本工介から活動立ち上げの動機と課題、これからの展望等について紹介。



● 市域第三の居場所ネットワークの発足

一部・二部終了後、「第三の居場所ネットワーク」の立ち上げに向けた準備会を開催。

準備会に残っていただいたのは団体・個人の57名。参加団体の顔合わせと自己紹介の後、高槻市内において子ども分野を始め多様な活動を行う団体、企業、大学、学校、行政等が一堂に会し、市内において協働しながら「第三の居場所づくり」を支援・行動していくためのプラットフォームを発足する趣旨を確認しました。



11月20日（土）午後1時半から現代劇場において第三の居場所ネットワークを正式発足。

座長に三木正博さん（元平安女学院大学子ども・教育学部学部長、高槻市子ども・子育て会議委員）をお迎えし各団体の活動紹介を皮切りに今後のネットワークの方向性について共有しました。



地域から広がる第 3 の居場所 アクションネットワーク

(※通称募集中)

● 趣旨

高槻市内において子ども分野をはじめ多様な活動を行う団体、企業、大学、学校、行政、医療関係、個人等の関係者が一同に会し、顔を合わせ、情報交流 をする中でゆるやかなネットワークを築く。

● 会の 3 つの機能

- ①ネットワーク間の顔がつながる
- ②情報交流と助け合い
- ③支援構築に向けたアクション

● 会の方向性

- ①民間だからできるアクションを進めながら将来的には「官」(行政等)とも協働
- ②コロナ禍、緊急性の高い社会的不利層への支援からはじめ様々な層へ広げる
- ③子ども分野からはじめ障がい、高齢、外国人支援分野等へ広げる

● 具体的な動き

- ①団体さん同士それぞれの
動き ヒト・モノの交流や協働等
- ②事務局主導の動き
フードパントリーサテライト、企業支援のしくみづくり、校区ネットワークづくりの伴走など



● アクションネットワーク参加者の内訳

セクター分類	団体数（団体）	参加人数（名）
市民活動団体	48	88
企業	8	14
大学・学校	5	19
宗教関係	4	6
医療関係	4	6
個人	17	17
合計	86団体	150名

(2025年3月31日現在)

団体登録は86団体、ご参加いただいた方は150名（2025年3月時点）になりました。

団体、企業、大学、個人のほか宗教関係者、医療関係者にもご参画いただけることになり、おかげさまで想定以上の多セクターでの横のつながりが実現しています。

● ネットワーク会議の開催

対面とオンラインのハイブリッド形式で、隔月ごとに参加者が集まり情報共有を行います。

対面会場として富田（コミュニティスペースNikoNiko）

平安女学院大学、協働プラザ（紺屋町）、西法寺（東天川）、地域ひといき（大塚町）

それぞれご協力いただき開催しています。



「地域から広がる第三の居場所アクションネットワーク」も 第17回の開催に

認定NPO法人全国子ども食堂支援センターむすびえ（湯浅誠理事長）による休眠預金助成「居場所の包括連携によるモデルづくり事業」を契機として2021年11月に発足した「地域から広がる第三の居場所アクションネットワーク」も2024年度末には高槻市内86団体を超え、年4回をめぐりにネットワーク会議を開催しています。今年度は、内閣府等が行う「子どもの未来応援基金」の助成を受け行っております。

オンライン（ZOOM）形式と対面での形式を併用して開催しています。

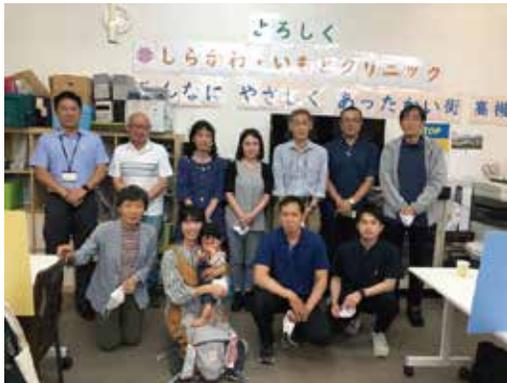


会では、新規団体の紹介や団体同士の交流、新たな取組の報告、学習会など多様なメニューを行っています。浄土真宗本願寺派島上組からは昨年に引き続き今年度も檀家さん等がお米を持ち寄って子ども食堂等に寄付する「ほっとけ米（まい）プロジェクト」の決定の報告や新谷先生（同志社女子大学）による調査研究をはじめ会を重ねるごとに高槻市さんや社会福祉協議会さんも参加いただけることとなり、「子ども食堂等を通じた多職種協働の地域づくり」に向け確実に地域に広がっていることを参加者のみなさんで共有できる会議となりました。

小地域の包括支援のネットワークづくり

市域全域を対象としたネットワークの構築の動きと並行して、小学校区や中学校区単位での小地域の包括支援の仕組みが広がっていくよう市内において南と北、それぞれのエリアのモデル校区を定め、地域の団体の皆さんとともにネットワーク構築に動き始めました。

桜台エリアで団体間のネットワーク構築



桜台エリアでは地元の医療機関「しらかわ・いもクリニック」の白川先生のお声がけのもと入らせていただくこととなり、校区で活動されているみなさんとのネットワークをつくっていく流れとなりました。ネットワークにはナースングホームさん、うえだ下田部病院さん、えん食堂さん、ふうせん文庫さん、じゃんぷ学童クラブさん、桜台みんな食堂さん、民生児童委員の小野さん、堤コミュニティセンターさん、桜台小学校さんにも加わっていただいています。

この校区では、子ども食堂のチラシを共有すると、広報のお手伝いや子どもたちが安全に通える道の提案、場所や食品の提供など、事務局との協議だけでは生まれえない、地域の方々ならではの情報交流が行われています。「食支援」「子ども食堂」「文庫活動」「子どもが集うイベント」とやりたいことはそれぞれ異なるものの改めて「居場所」をキーワードに想いを分かち合う場が生まれています。

高槻の北エリアでの団体を越えたネットワーク構築

高槻の北エリアでは、NPO法人三島子ども文化ステーションが中心となり、親子の居場所作り『おかえりひろば』を2022年6月にスタート。地域の誰もが参加できる居場所づくり、「第3の居場所」にするべく北エリアの様々な団体や大学、シニア層の団体とも連携しながら運営をスタートしています。2024年度からは毎月実施。

広場のスタッフ・地域のボランティア・平安女学院大学や関西大学の学生達もサポートします。ここでは、地域の様々な支援団体と連携して高槻市の北部地域での拠点づくりを目指し活動しています。



アクションネットワーク事務局主導の動き ～フードパントリーサテライト紹介～

① つばめ学習会×グーグー藤カレー×天然酵母パンなかむら（1/29スタート）毎月

市域全域に食の支援を広げていくためのフードパントリーサテライトのひとつが初めての開催。市民会館にて「高槻つばめ学習会」さんが開催する学習会に通う子どもたちとご家庭への配布。土曜日の16時頃に訪問すると、熱心に学習する子どもたちと講師のみなさんの姿が。「天然酵母パンなかむら」さんからは5種類ものパンを朝から焼いてご用意いただいたとのこと。「グーグー藤カレー」さんからはひとつひとつ異なるメッセージ付きのカレーが配布されました。

フードパントリーを楽しみにしていた子がたくさんいたようで「美味しかった」「家族が喜んでた」と帰ってから子どもたちがコメントをくれていたことを知らせていただき、講師のみなさまからは、「家庭が全面的に担うことが難しい部分を、こういう方たちが支えて下さると助かりますね」「子どもたちを支援する人たちの連携ってすごいですね」というメッセージをいただき、良いスタートになったことが実感できました。

アクションネットワークによる横のつながりから支援がひとつ実現、新型コロナ禍で必要性が高い今、つながるところから確実に広げていきたいと思っています。

フードパントリーでつながった 子どもたちとのほっこりエピソード

地域の中学校の卒業式に出席したところ

つばめ学習会の中3の生徒さんにもお会いしました。

顔を覚えて下さっていてお祝いのお声かけもできました。



つばめの卒業生で高校を卒業した子が、4月からの就職前に、社会経験としてグーグー藤カレーさんのお店でアルバイトをさせていただいています。インターン第1号です。これまでも卒業生がバイト先で成長する姿をたくさん見てきました。バイト先で出会う大人って大事なあと痛感しており、良い店長さんがいるおススメできるバイト先ができてすごく嬉しいです。

今年度の卒業生は進路がそれぞれ確定しました。卒業生は、最後のカレーとパンでしたが、この3ヶ月間は学習会に来るモチベーションが上がっていました。勉強にも良い影響が出たと思います。



② 七中校区×キヨサキあーちゃん食堂×のりまきのすけ×味源（1/26スタート）毎週

七中校区では柱本小学校の目の前「T-BOX」さんに場所をお借りして、地域の子どもたちやご家庭への配布を実施しています。「のりまきのすけ」さん、「味源」さんよりお弁当を作っていただいています。店舗への受け取りから配布まで「きよさきあーちゃん食堂」の松岡ご夫妻が動いてくださっています。七中校区でのパントリーは毎週行っています。必要なご家庭に届いている実感があり、これからどんどん配布数も増える予感がしています。

松岡さん
民生主任児童委員や
青少年指導員を地域で
担われています。



開催スタートから様々な反響



NPO法人高槻ライフケア協会のみなさま。なんと高槻市内を縦断して応援に。お米を40個分、1キロずつに丁寧に梱包してご提供いただきました。



「しらかわ・いもとクリニック」クリニックのある地域で食の支援を広げたいと考えておられてお問い合わせをいただきました。



新型コロナ禍で緊急性の高い場から実践し、全体へと広がっています。

緊急食糧支援

市域全域のネットワークの中でとりわけ生活困窮家庭をはじめ社会的不利を抱える層が集住する市内の公営住宅5エリアにおいて活動する子どもの居場所を運営する団体に呼びかけ、それぞれの活動場所において、食材配布を行いました。また、高槻市の子育て支援を担当する部署や社会福祉協議会とも連携し、

生活困窮家庭やヤングケアラー、ひとり親家庭や特定妊婦の方々などにも食材等の緊急食糧支援を行いました。



「子ども食堂交流会・開設や制度利用のポイント講座」開催

6月16日(木)午後3時より「地域から広がる第三の居場所アクションネットワーク」主催による「子ども食堂運営のポイント講座&交流会」を開催。交流会はコミュニティスペースNikoNikoとZOOMオンライン併用で行われ21団体31名の方にご参加いただきました。



「子ども食堂をはじめたいんだけど何からすればいいの？(人は？食材は？お金は?)」「ほかの子ども食堂さんはどんな形式でしてるの？」など、当法人に寄せられる相談も多く、お互いの交流と高槻市の行政職員さんをお招きしての企画。

三木正博専長挨拶を受けて子ども食堂運営者相互の交流と開設に当たっての衛生管理、保険加入、アレルギー等の留意点を再確認。その後、高槻市子ども未来部子ども育成課・石本課長ならびに村上副主幹さんより高槻市の「子ども食堂運営支援事業補助金」についての制度のご説明をしていただきました。

子ども食堂運営補助金の制度説明にお越しいただいた高槻市の皆さん、そして参加者のみなさまもありがとうございました！

学びの支援プロジェクトを実施

市域広域事業「学びの支援プロジェクト」が始動しました。1月29日の第一回目を皮切りに研修を重ねています。

本プロジェクトに参加して下さっている学生のみなさんと共に、「子どもたちの行動の背景にあるものに寄り添う」をテーマに、社会的養護をはじめとする社会的不利を抱えた子どもたちへの支援の在り方やエンパワメントを促すスキルについて学ぶ場として、多くの学生さんが参加して下さいました。

皆さんの真剣に、熱心に学ぶ姿勢にこちら側も刺激を受けながら、学びを深め、そして互いの関係性も深めてゆく時間となりました。あたたかい雰囲気の中、本プロジェクトを始動することができて、とても光栄に思います。

ここに参加した学生さん含め様々なボランティアさんの協力で学び支援を行いました。



企業との協働による食支援のしくみづくり（第1期）活動報告

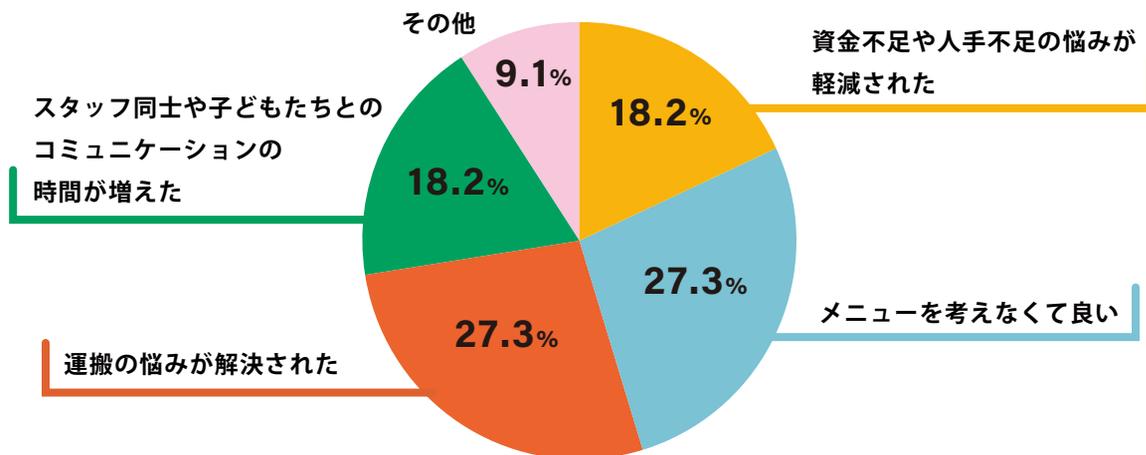


食支援を市域全域に広げるべく、市域広域事業「第三の居場所アクションネットワーク」を通して市内の子どもを対象に食支援を実施する団体（子ども食堂に限らない）と、企業との協働による食支援のしくみづくりの第1期が無事に終了しました。株式会社ミートモリタ屋さまからは食材、お弁当、ゼリーを、株式会社彩回転寿司喜楽さまからはお弁当や冷凍ケーキをご提供いただきました。

さらに、株式会社甲和ビルドふくろうのおうちさま、テニスガーデン高槻さま、株式会社宮田運輸さまよりご支援をいただき、さらに充実した食支援を届けることができました。また、株式会社宮田運輸さまにはそれらの提供物資を各支援団体へ運搬していただきました。おかげさまで4つの拠点を通過して、総計1,138食のさまざまな食を子どもたちに届けることができました。

取り組みの趣旨にご賛同いただき、こうして1年間ご協力いただいたこと誠に感謝申し上げます。

■「得られた効果について（複数回答可）」のカウント数



また、団体さまには終了後アンケートにご協力いただき、今回の取り組みの効果をうかがうと上記のグラフのような回答をいただきました。運搬の悩みが解決され、決められたものが届く月があることでメニューの考案や準備の手間が省けたことが、結果的にスタッフや利用者とのコミュニケーションの時間の充実につながった団体が多くありました。

第三の居場所応援キャンペーン

この間企業さまや個人のみなさまからたくさんのご寄付をいただいております。

3つの企業さまからは「市内の子どもたちへの食支援をさらにひろげることを目的として、また個人のみなさまからは「市内のこどもたちを応援したい」という想いをあずかりました。この3年間でアクションネットワークに参画いただき顔がつながったみなさまを対象として企業さま・個人さまの想いを子どもたちに届けていただきたく本キャンペーンを企画しました。採択団体への応援は1拠点につき最大10,000円です。

◆キャンペーン①：企業さまからの応援をこどもたちへ！（採択6団体）

※「株式会社宮田運輸」さま「株式会社甲和ビルドふくろうのおうち」さま「テニスガーデン高槻」さまよりいただいた応援金を活用しました。

食材や食品の購入のみ可。子ども食堂に限らず、フードパントリーやイベントも対象。調理のための食材をはじめ、お菓子やジュース、調味料、保存食、ケーキなども想定しました。

応募団体（提供場所）	提供内容
子ども食堂等、地域の居場所：3か所	・バレンタインイベントのためのスイーツ ・子どもたちへの食支援 ・食材購入の補助
フリースクール：1か所	・昼食や調理実習の材料費
学習支援：2か所	・活動中のお菓子の提供 ・中3生受験勉強の昼食提供

～活動の様子・運営者からの声～



可能な限りみんなで一緒に作って、一緒にご飯を食べることを大事にしています。物価も高騰し厳しい中、このようなご寄付とても有り難いです。



非日常（特別なこと）を多く子供たちに提供したいと思っています。高槻には地元を支援してくれる素敵な企業がたくさんあることを子供たちにアピールし、高槻愛を育てていきます。

生徒たち、生徒同士が触れ合うことも「食育」だと考えるようになりました。



◆キャンペーン②：個人さまからの応援をこどもたちへ！（採択10団体）

※個人さまよりいただいたご寄付を活用しました。

子どもたちのために使用されるものであれば内容は自由。学習のための文具、居場所で使用するおもちゃやカードゲーム、本や漫画、イベントで使用する景品などを想定しました。

応募団体（提供場所）	提供内容
文庫活動：2か所	・本やマンガ、ボードゲーム等 ・本棚（環境整備）
子育て支援、民間学童保育：3か所	・楽器、絵本 ・バランスボール、遊び道具他 ・バランスボール、ボードゲーム他
フリースクール：1か所	・ボードゲーム他
子ども食堂等：2か所	・サッカーゴール ・訪問家庭へ衣類やおもちゃ等
教育プログラム、体験学習：2か所	・救命訓練機材 ・地域の学校等に提供する絵本

～活動の様子・運営者からの声～



子どもたちが選んだので到着したときは非常に喜んでいました。

子ども同士や異年齢で遊び交流できる場を作ることができました。

親子が違う場所で過ごしてもお互い楽しかったね！と言える時間をこれからも提供していきます。

新しいものを買ってあげたいけど余裕がなくて買うことができない。新学期に向けて子どもたちに喜んでもらえました。



～担当スタッフコメント～

高槻市内にはこどもたちの小さな声を拾い、それぞれの方法で活動されているたくさんの団体があります。中には、得られる財源がなく持ち出しになっている場所や、今ある財源だけでは手が届かない困り事に直面して悩んでいる方も少なくありません。今回は対象を「こどもたちへ」とぐっと広く募集しました。資金の支援は法人としてもはじめての試みでしたが、金銭面に留まらず、寄付者の想いをこどもたちに伝えて大切に活用してくださる団体さんにお渡しすることができ、また力になったとメッセージをたくさんいただくことができました。この度はご支援いただいたみなさまのおかげでこのような素敵な企画が実施できました。改めて感謝申し上げます。

ご支援の広がり

「子どもたちの未来のために」をキーワードに企業や個人、お寺さんなどご支援の広がりが生まれています。

サンスター(株) アメニティ製品



丸大食品(株) 食材支援



コニカミノルタ(株) フードドライブによるご支援



浄土真宗大阪教区島上南組の本田組長が6合のお米を350セットお届けに。

「お米をひと握り（一合）持ち寄りほっとけ米（まい）プロジェクト-子どもたちを育てるために-」を目的に高槻市内の浄土真宗本願寺派17ヶ寺のみなさまが各寺院を通じて門信徒さんや地域のみなさまより募ったお米を支援物資として贈呈。

「天台宗 神峰山寺さん」 お菓子の提供 などなど



議員さんとの連携に向けて

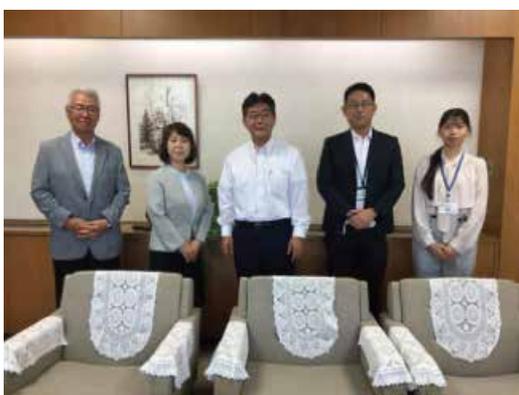
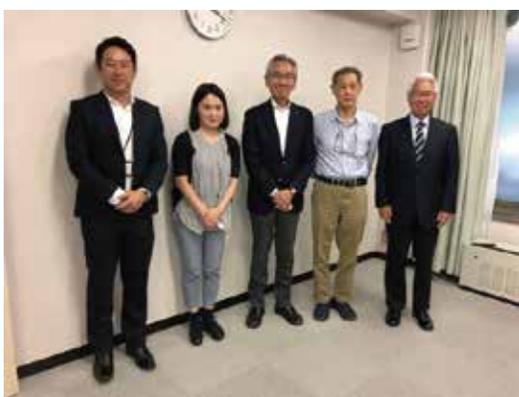
この間、地域から広がる第三の居場所アクションネットワークの構築及び食支援等の実践を広げつつ、同時並行で政策提言のため党派を超えた高槻市議会議員のみなさまのもとへ挨拶にうかがい、ネットワークの趣旨説明と協力依頼をさせていただきました。

活動についてみなさまから前向きなご意見、ご感想をいただきました。

高槻市議会の山口重雄議長、真鍋宗一郎副議長にお会いした際には、山口議長からは教育委員会にいらっしゃった頃のお話にはじまり、こうしたネットワークにおいて人と人とのつながりができることの大切さをお話しいただきました。

また、真鍋副議長からは市内の企業さんとの連携によるスキーム作りの大切さについて助言をいただきました。

吉田ただのり前議長からは、「市議会全体としても地域の中で第三の居場所を広げようとするこのような動きに反対される人はおられないでしょう、ぜひ協力していきたい」と心強いお言葉をいただきました。



公明党議員団の方々には、子育て、子ども施策について党としても中心に据えられ力を入れられてきたことから子どもたちを中心に超党派で取り組んでいくことの大切さをお話しいただきました。

また、ネットワークを通じて具体的な実践メニューを創っていくことの必要性和富田地区のまちづくり構想についても貴重なご意見を頂きました。

さらに先日のNPO協働フェスタで子ども食堂についてご質問をお受けする機会がありました。そのきっかけで今回この場を頂戴し、改めて当会についてご説明させていただくこととなりました。

まだ動き出したばかりの当会ですが、前向きな応援のメッセージをいただきました。

議員さんとの連携に向けて



また、後援会が主催されている「子どもの権利」ワーキングチーム研修会にお招きいただき、当法人の取り組みをお話させていただきました。

市民連合議員団の方々からはネットワークの方向性のひとつである官民連携や政策提言に向けた動きについて「ひとつの小さな団体だけが声を発するのではなく、多くの団体がつながり協働することで成し遂げることができる」と心強いメッセージをいただきました。



自民・無所属議員団の方々からは自身の経験から子どもたちがさまざまな社会体験をする場の必要性をお話いただきました。



大阪維新の会高槻市議会議員団の方々からは大阪府への働きかけに加え、市内全域において食材支援を広げていくための団体さんをおつなぎいただくご提案を頂きました。



この間、党派を超えて多くの議員のみなさまにご挨拶と趣旨説明に伺っています。子ども支援の前進を真ん中に据えながら多様な方々からのご理解を頂き、社会変化の前進のために邁進したいと考えています。

ネットワークの構築にあたっては党派かわらず様々な議員さんからご支援を頂ければと思っております。ご興味頂いた方はぜひよろしく願いいたします。

※肩書は2022年度当時

市議会に取り上げていただきました

桜台エリアでの食支援ネットワーク構築を進める中で、高槻市議会において吉田あきひろ議員から「子ども食堂について」居場所の包括支援が生まれていくうえで非常に意義のあるご質問をしていただきました。主な質問事項は3点。



- 1 高槻市における子ども食堂への支援のこれまでの取り組みの総括
→高槻市回答：運営団体の要望を受けて補助金要件を緩和
- 2 高槻市施策の今後の方向性：「子ども食堂」の拡大要望や補助金拡充、相談支援、関係団体との連携のあり方や今後の展開
→高槻市回答：民間によるネットワークが創られ、市としても補助金の説明会に伺った。
- 3 地域住民、コミュニティ、学校関係者、社協との連携の促進

全文につきましては当法人HPに2022年6月25日の記事にて掲載させていただいております。
(URL : <https://x.gd/TG6FC>)



国レベルでも子ども食堂等と自治会・行政・教育委員会の連携を通知

この間、平成30年には厚労省から「子ども食堂の活動に関する連携・協力の推進及び子ども食堂の運営上留意すべき事項の周知について（通知）」が出され、子ども食堂の意義を踏まえ、行政のほか、子ども食堂を取り巻く地域の住民、福祉関係者及び教育関係者等が、運営者と認識を共有しながら、その活動について、積極的な連携・協力を図ることの重要性が謳われています。

また、2023年には「こども家庭庁」の発足にともない「こども大綱」および「こどもの居場所づくりに関する指針」が出され、今後より一層、子どもの居場所づくりや地域との連携が必要となってきています。

「地域から広がる第三の居場所－ひとりぼっちのいないまちをつくる」実践報告会

2025年3月8日（土）JR高槻駅南にある総合市民交流センター（クロスパル）で「地域から広がる第三の居場所－ひとりぼっちにいまいまちをつくる」講演会を開催。「地域から広がる第三の居場所アクションネットワーク」共同事務局であるタウンスペースWAKWAKと高槻市市民公益活動サポートセンターとの共催です。



濱田市長にもご挨拶いただき、記念講演では志水宏吉（日本教育学会・全国理事）さんから学力格差・教育格差から見てくる地域との協働の重要性について指摘。

続いて、岡本工介・WAKWAK事務局長からは子ども家庭庁の動きも紹介しながら高槻市域全域におけるネットワークの構築などの取り組みを紹介。続いて、新谷龍太郎（同志社女子大准教授）さんから本年2月に実施した高槻市における子ども食堂等居場所調査結果の報告が行われました。



最後に第三の居場所アクションネットワーク座長の三木正博さんからまとめの挨拶をいただき、講演会を終わりました。講演会には約80名のみなさんにご参加いただきました。最後まで熱心に参加いただいたみなさん、本当にありがとうございました。

高槻こども食堂アンケート 2024 調査・研究報告

同志社女子大学現代社会学部現代こども学科
准教授 新谷 龍太郎

1 概要

本調査は、高槻市内のこども食堂の実態を明らかにするために、2025年2月2日から25日の間で実施した。市内15箇所のこども食堂に質問紙を送付し、こども向け質問紙は9ヶ所141人分（低学年21%、中学年33%、高学年38%、中学生6%、年長・高校生・無回答4人）、保護者・地域住民・スタッフ向け質問紙は111人分（1箇所12人分のWeb回答含む）、運営者13人分（5人のWeb回答含む）から回答を得た。また、追加調査として4人の運営者にインタビュー調査を実施した（2025年2月14日、17日、19日）。

質問紙作成にあたっては、認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ（以下、むすびえ）の実施した「第1回全国こども食堂実態調査結果のご報告（確定版）」「第8回こども食堂の現状&困りごとアンケート」「さくらプロジェクト(2019-2022年度)報告書」や、こども食堂の質的向上やソーシャルイノベーション評価をテーマとする論文などを参考にした。こども向け質問紙では、「週何回くらいここに来ますか?」「ここにくる前と比べて、自分に自信が持てるようになったと思いますか?」「ここで新しい友達ができたと思いますか?」「この場所は好きですか?」「この場所は安心できる場所と思いますか?」「この場所で会った人と、この場所以外でも会ったり、話したりしますか?」と、頻度や目的、変化や安心などについて質問した。保護者・地域住民・スタッフ向け質問紙では、「この場所をどのように知りましたか?」「この場所を利用する理由を教えてください」「この場所を利用してお子様にどんな変化を感じましたか?」「今後、この場所で提供してほしいサービスを教えてください」「こども食堂の利用を通して、どのようなことを感じましたか?」「この場所で出会った人と日常的に交流を持っていますか?」と、認知ルートや目的、変化や今後望むこと、感じたこと、交流について質問した。運営者に対しては、「第1回全国こども食堂実態調査」を参考に、開催頻度や平均利用人数などの概要、特別な配慮を要すると思われるこども、費用、成果と課題について質問した。

調査から分かったことは、こどもの9割程度が「この場所が好き」「安心できる」と答えており、6割程度が「自信が持てるようになった」「新しく友達ができたと答えており、多くのこどもにとって安心でき、交友関係の広がる場所となっていることであった。保護者・地域住民・スタッフも、5割程度が「地域の人とつながりができた」「会ったら話す」と答えており、地域でのつながりが生まれる場所となっていると、7割程度が「今後も活動を継続してほしい」と答えている。運営者もまた、こどもや保護者にとって有意義な場所となっていることを実感しているが、一方で人手不足や継続資金の不足を訴えており、多くの人に継続を求められながらも、継続することが容易ではない環境にある様子が伺えた。以下、具体的にアンケート結果を見てみよう。

2 こども、保護者、地域住民、スタッフの声

2-1 こども向け質問紙

参加頻度についてみると、月1回程度(65%)が最も多く、週1回(20%)が次いで多い。目的は、食事(87%)、遊び(71%)、おしゃべり(69%)であり、勉強(38%)を目的とする割合は多くない。しかし、学年別に見ると、高学年では勉強目的が多く(55%)、中学生は全員がおしゃべり(100%)を目的としており、学年別に違いも見られた。「自信が持てるようになったと思うか」という質問に対しては「とても思う」(16%)、「少し思う」(43%)と6割程度が肯定的な意見であった。この回答の背景には、発達や家庭、学校の要因があるが、こども食堂とこどもの自己肯定感には一定の関係があると考えられる。「新しい友達ができたと感じますか」という質問に対しても、「とても思う」(21%)、「少し思う」(36%)と6割程度が肯定的な意見であった。ただし、学年別に見ると、中学年では「まったく思わない」(全体17%、中学年28%)が多い。これは、もともと交友関係のある友達とこども食堂に来るからだと考えられる。一方、中学生は「とても思う」(全体21%、中学生44%)が多い。この回答が、こども食堂に通っている中で新しい友達が増えたと感じたのか、

中学生になって新しく友達ができた結果なのかはアンケートからはわからないため、それぞれの子ども食堂に通う中学生に着目して考えていただきたい。

「この場所が好きですか」(とても好き52%、少し好き40%)、「この場所は安心できる場所ですか」(とても思う53%、少し思う37%)はいずれも9割が肯定的な回答、5割が強い肯定(「とても好き/思う」)をしており、市内の子ども食堂が安心できる場所となっている様子が伺える。「この場所以外でも会いますか」という質問に対しては、「来る前から会っていた」(52%)が最も多く、大半が元々知っている関係である一方で、「会った時には話す」(15%)という回答も一定数あった。

自由記述を見ると、「遊び」(「もっと遊ぶ時間がほしい」「クイズが面白かった」)や「食事」(「いつもおいしいご飯をありがとうございます」)、「おしゃべり」(「食事をしながら友達と交流できることが楽しい」)を楽しむこどもの様子が伺えた。高校生や大学生との交流も楽しみにしている声も多く寄せられていた(「大学生がたくさんいて楽しい」「高校の先輩と知り合くなるきっかけを持てたのがとても嬉しい」)。

2 - 2 保護者、地域住民、スタッフ向け質問紙

認知ルートを見ると、「友人・知人」(56%)が最も多く、チラシ・ポスター(18%)、学校や園(11%)、SNS(5%)よりも、口コミによる認知が大きいことが分かった。自治会の回覧板や学童、教会などを通じて知った人もいた。利用目的は、「こどもが遊べる場」(50%)、「日常と違う経験ができる」(47%)が大半を占める一方で、「ご近所付き合いの場」(21%)、「家事や育児から解放される時間」(20%)という声も一定数あった。こどもに感じる変化では、「友達が増えた」(36%)、「食への関心が高まった」(33%)という声が多かった。ただし、変化=善ではなく、そのままのこどもを受け入れる、変化を求められない場という見方も必要であろう。今後提供してほしいこととして、「思い出づくりの活動」(51%)、「特別な体験」(43%)などがあるが、最も大きい声は「活動の継続」(68%)であった。「子ども食堂の利用を通して感じたこと」は「地域の人とつながりができた」(53%)が最も多かった。「日常的に交流を持っていますか」という質問でも、「会った時には話すようにしている」(47%)という声が半数程度あり、子ども食堂が地域とのつながりを生む場となっている様子が伺える。

自由記述を見ると、「いつもありがとうございます」と感謝を述べる声が多数寄せられていた。他にも「家では食べなかった食材をこどもが食べるようになった」「栄養バランスのとれた食事」など、提供される食事に対する感謝も多く寄せられた。学童以外の放課後の居場所(「学校、学童とはまた違ったコミュニケーションの場」「学童以外で友達と遊べる」「他人と緩やかにつながれる場」)を評価する声も会った。また、「こどもが遊べる場で親子共々リフレッシュさせてもらっています」「周辺にこども会もなく、知り合いも少なかった土地ですが、いつも温かく気さくに声をかけてくださる皆様のおかげで、子育ても楽しむことができるようになりました。親にとっても癒しの場です。」「月1回だけでもご飯を作らなくて良いと、自分に余裕ができた。何回も通うようになり、顔見知りが増え、声をかけてもらえるようになった。」と、保護者の癒しの場となっていることが分かった。地域住民にとっても、「お供えのお菓子をお下がりとして子ども達へ届けています。また、いただいた日用品も大変喜んでくれています。毎週水曜日、子ども達の笑顔、笑い声を見て、聞いて、こちらも元気ももらっています。」と、支援することで、地域側にとっても活力が生まれる場となっている様子が伺えた。

3 運営者の声

今回の回答者だけで見ると、2020年時点では市内に2件の子ども食堂しかなかった。むすびえの実施した「第1回全国子ども食堂実態調査結果のご報告(確定版)」と比較すると、全国的には2017年から2019年に開設した子ども食堂が最も多い(49%)ことを踏まえると、市内でのスタートはやや遅かったと言える。しかし、2022年には7件、2024年には13件と、ここ4年間で急激に増えた。2021年度からの「地域から広がる第三の居場所」ネットワークづくりが子ども食堂増加を後押しとなった。

開催場所は多様であり、一軒家や寺院、教会、高齢者施設、会社の空き家、商店街の施設、保育園内の交流室、デイサービスに使用されていた部屋、コミュニティセンターなどで実施されている。会場内での食事の提供が7割、お弁当やフードパントリーが5割程

度である。広報手段はチラシ(58%)やホームページ(42%)、Instagram(33%)、LINE(25%)である。

活動目的を見ると、「見守り支援(虐待防止)」(市内46% 全国35%、以下同じ)、「遊び場づくり」(62%、44%)、「親の子育て支援」(75%、52%)、「地域づくり・まちづくり」(67%、56%)が高槻市の特徴として浮かび上がる。参加するこどもの数は11人以上が9割(全国は6割程度)であり、その分スタッフの人数も必要になると考えられる。特別な配慮を要するこどもは、「孤立している」(56%、42%)、「外国につながりがある」(56%、47%)が全国よりもやや多い。

運営費について見てみよう。子ども食堂により開催頻度の差が大きいため中央値で見ると、毎月2回、年間で24回程度の実施がされている。1回あたり21人、年間で1か所360人程度のこどもが参加する計算となる。1回あたりの経費は8000円で、年間経費は177,600円となる。ただし、週3回実施している子ども食堂では、これ以上の費用がかかる。年間経費と参加員数で計算すると、1回・1人あたり493円かかる。全国では、年間経費が10万円から30万円かかる層が最も多く(37%)、50万円以上かかる層も多い(25%)ことを考えると、市内の年間経費は低く抑えられていると言える。

連携先は学校(67%)が多く、企業(50%)、寺社(25%)、保育園(25%)とも連携している。インタビューに応じてくれたA食堂では、子ども食堂を通じて地元の企業であるサンコレック社など、実は世界的なシェアを持っている会社が近くにあることをこどもが知る機会になったと語ってくれた。ミートモリタ屋や宮田運輸、テニスガーデン高槻、サンスター、丸大食品、コニカミノルタを始め、子ども食堂に協力してくれる企業は多い。各校区における支援企業の発掘は、今次学習指導要領で求められている「社会に開かれた教育課程」の連携先の発掘にもつながると考えられる。

自由記述からは、「家庭では食が進まないお子様が食事が進んだ」「コミュニケーションをとることが難しいお子様がお友達を作ることが出来た」などのこどもの変化に関する回答が見られた。不登校のこどもがいる家庭の祖母が参加したことから、こどもや保護者も参加し、多様な人の価値観に触れてようになった事例や、学校に行けなかった中学生が高校受験に向かうようになった事例、外国につながるこどもが日本の文化に馴染み、学習支援を通じて高校受験に向かうようになった事例なども見られた。諸事情で家で過ごせないこどもや、家に両親がいなくご飯が食べられないとボランティアの家に訪問してきたこどもなど、こどもにとっての緊急避難先となっている事例も見られた。一方で、「本当に利用して欲しい人に届いていない点も否めない。」「本当に困窮すると来なくなる子が多い」など、支援を必要とするこどもや家庭にアプローチすることが難しく、学校との連携が必要だという声もあった。思春期で保護者と気持ちがすれ違っていたこどもが、学生ボランティアが共感してくれたことで心が開いたなど、学生ボランティアの存在意義や学生自身の成長についてのエピソードも見られた。

一方で、アンケートでは「継続的に参加できるスタッフの確保が難しい」「物価上昇による食材の購入が厳しい」「会場の使用量が高い」など、人や資金の不足を訴える声も多く見られた。しかしながら、補助金申請は煩雑であり、報告に要する労力と時間も大きい。利用者の求めに応じて活動を継続するために資金不足を解消したいが、忙しい中では助成金情報を見つけ出し、申請する余裕が持てないという声に耳を傾ける必要があろう。B食堂では、親のつながりが弱くなる中で子ども食堂の果たす役割は大きいと考えているが、食費に充てられる予算の少なさや、会場の使用制限など活動継続の難しさを語ってくれた。一方、C食堂は寺社を会場としており、そこに運営に必要な備品などを置かせてくれることが助かるという。D食堂は、補助金があることで、地域で必要とされるフードパントリーを始めた。補助金が出なくなったからといってやめるわけにもいかず、月2万円ほどの持ち出しで継続している。容器代に費用がかかるのだ。このように、厳しい状況の中で子ども食堂を運営する人たちは、こどものため、保護者や地域のために頑張っているが、活動の継続のために支援を必要としている様子が伺えた。

4 まとめと提言

これまでに見てきたことをまとめてみよう。こども向け質問紙からは、学年ごとに利用目的や交友関係が異なる様子が見てとれた。ここから、それぞれの子ども食堂を利用する年齢層を踏まえて、活動内容を考える必要があることが伺える。子ども食堂に、高校生や大学生が参画することで、活動が活性化したり、こどものロールモデルとなる様子も伺えた。例えば、学生ボランティアの交通費補助として、子ども食堂に通うための市内バスの無料乗車券や福祉タクシーのチケットを支援することも検討したい。

また、保護者・地域住民・スタッフ向けアンケートでは、大半が子ども食堂の存在を口コミで知る様子も伺えた。一方で、「本当にきてほしい層がこない」という声もあった。支援を必要とするが来ない層に対してアプローチするために、訪問看護を用いた支援モデルづくりなどに取り組む必要があろう。子ども食堂が親支援や地域活性化にとって重要な場であることが今回の調査で明らかにな

った。その継続のために、行政にはこども食堂の存在を周知したり、食材寄付や遺贈寄付、空き家の活用など支援の掘り起こしに取り組んでほしい。調査では、こども1人・1回あたりで500円程度が必要になることもわかった。試算した年間経費を元に、スタッフの確保や今後の活動の拡大、物価上昇などを加味して考えれば、1団体30万円程度の予算を組み、こども食堂を支援する体制の構築が望まれる。そのための申請業務、報告業務はなるべく簡素化されることが望ましい。それが難しければ、申請・報告業務や運営業務を伴走支援する中間支援団体への業務委託なども検討してほしい。

法人紹介
タウンスペース WAKWAK

ひとりぼっちのいないまちをつくる

一般社団法人 タウンスペース WAKWAK

ビジョン (めざす社会)

“ひとりぼっちのいないまち”をつくる

ミッション (存在意義)

- ・個人、団体、地域をつなぐハブとなり、出会いやまちの“わくわく”を創造する場を創ります。
- ・制度から取り残され、社会から孤立させられている人たちに光をあて、多セクターとの共創により、誰にとっても住みやすいまちを創ります。

アクション (行動・軸)

私たちは「ひとりぼっちのいないまち (社会的包摂)」の実現のため、「ローカリティ (包摂のコミュニティづくり)」と「インターメディアリー (中間支援)」の2つのベクトルで地域と社会に働きかけを行います。

事業一覧

タウンスペース WAKWAK では、「ひとりぼっちのいないまち（社会的包摂）」の実現のため、「富田エリア事業（ローカリティ）」と「中間支援事業（インターメディアリー）」の 2 つの柱で事業を展開しています。

1 富田エリア事業（ローカリティ）



高槻市富田地区を対象エリアに多様な団体のプラットフォームの役割を担いながら子どもから高齢者までを対象とした官民、多セクター連携による「切れ目のない支援」の構築をめざし多岐にわたる事業を行っています。

2 中間支援事業（インターメディアリー）



高槻市域全域を対象に広く多様な団体や人たちの協働によるネットワーク化を通じて、「中間支援」としての活動を行っています。

3 視察受け入れ／講師派遣事業

4 調査・研究開発事業

5 その他事業

地域・家庭・学校・行政・大学・企業などと協力しながら

ひとりぼっちのいないまちをつくる!

1 地域との協働

まちづくりに住民の力を活かす

事業を支える住民のボランティア

子どもの居場所づくり事業をはじめ当法人の事業は多様な住民のボランティアによって支えられています。

こども食堂での地元校区民生委員児童委員中川さん親子による調理、わくわく食堂では、普段高齢者会食サービスのボランティアをされているボランティアサークル「ひまわり」の皆さんによる調理、元富田保育所の保育士さんによる「よちよちコーナー」、善太鼓の演奏、手話サークルトライアングルの皆さんによる手話うた、風の子文庫による絵本の読み聞かせや子どもの居場所、地元老人会による高齢者みまもり活動などなど。地縁組織ならではの、たくさんの住民の皆さんに支えられて事業の運営を行っています。



2 大学との協働 まちづくりに大学生の力を活かす

学校教員や保育士、福祉職を目指す 大学生や大学院生の力

これまで連携をいただいている平安女学院大学、大阪人間科学大学、関西大学に加え、新たに大阪大学との連携を図っています。



一つは「共創知」を生み出す場をテーマに産官社学連携による仕組「OOS(大阪大学オムニサイト)」の協定を2019年9月20日に締結しました。



もう一つは「未来共生イノベーター博士課程プログラム」の一環として大学院生が地方公共団体やNPOなどに出向き実践から学ぶ「公共サービスラーニング」の実習先となり、2019年10月からインターン生の受け入れがスタートしました。



子どもの居場所づくり事業には、将来学校教員や保育士、福祉職を目指す学生さんなどたくさんの大学生や大学院生がかかわってくれています。

様々な子どもたちと学生の時に関わり、そこで学んだことを現場に巣立った時に活かしてもらえたらと願っています。



3 地元学校園 「ゆめみらい学園」 との協働

「いまとみらい」

「いまとみらい」をテーマに総合的な学習の時間を通じて社会参画力の育成を図っている高槻市立富田小学校・赤大路小学校、第四中学校、富田認定子ども園の園児・児童・生徒が共生食堂「富田わくわく食堂」をはじめ多様な事業に携わって頂いています。



【ほっと Station 富田】

2018年、高槻市立富田小学校5年生の総合的な学習の時間の取り組みで、子どもたちが大阪北部地震による災害支援から学んだことを冊子化し、チャリティグッズとして制作。わくわく食堂に



において取り組みの発表とともに冊子のお披露目をしていただきました。

「社会の温度計をあげよう」

2019年、「レガシー」をテーマに高槻市立第四中学校3年生が地域の方々へこれまでの感謝を伝えるというテーマにてわくわく食堂の看板を作成し、届けてくれました。



2024年「社会の温度計をあげよう」をテーマに高槻市立赤大路小学校・富田小学校6年生有志による有志が100万人のクラシックライブとコラボ。



4 企業との協働

「SDGs」パートナーシップの実践

企業からの支援

この間、わくわく食堂へサンスター(株)による歯ブラシのご提供、TOA(株)や大阪ガス(株)によるワークショップ開催、ふーどばんくOSAKAやダイエーフードドライブ、丸大食品(株)、コニカミノルタ(株)による食品のご提供をいただいています。企業様のご支援に改めて感謝申し上げます。



市域全域を対象とした食支援の取り組み

市域全域を対象とした食支援の取り組みでは、(株)ミートモリタ屋、(株)彩、(株)甲和ビルド、テニスガーデン高槻、(株)宮田運輸からご支援をいただいております。

「SDGsトレイン 未来のゆめ・まち号」

子どもの居場所づくり事業は2018年度より阪急阪神ホールディングスグループ(株)が行う「阪急阪神 未来のゆめ・まち基金」より助成を受け実施。

同グループが阪急阪神 未来のゆめ・まちプロジェクト10周年を記念して「SDGsトレイン 未来のゆめ・まち号」を運行。



同グループや国・沿線自治体・協賛企業・市民団体のSDGsの取り組みについて車両ラッピングや車内ポスターで情報発信を行う中で当法人の取り組みについてもご紹介いただきました。



トピックス -1

マスメディアでの紹介



**「ただいま～と言える子どもたちの居場所づくり」が
NHK 総合 TV「課題解決ドキュメント」で
全国放映されました！**

1 「子どもたちが安心して元気になれる居場所づくり」を NHK 全国放送局が取材放映

2017年の2月から4月まで約3カ月にわたって取材
いただいていた「ただいま～と言える子どもたちの居
場所づくり」が4月30日(日)午前10時5分～48分に
NHK「地域魅力化ドキュメント ふるさとグングン!」
として放映されました。



2 滋賀県の先進的な取り組みからも学ぶ

取材にあたっては、NPO法人子どもソーシャルワークセン
ター代表の幸重忠孝さんに事業立ち上げから関わっていただ
き、滋賀県大津市・米原市での先進的取り組みの見学もさせて
いただきました。

3 番組取材には多くのみなさんの協力が

スタジオ進行は幸重忠孝さん、俳優の風間トオルさん、ぺこ&りゅーちえるさん。番組では、孤食・不登
校・いじめ・貧困…ひとりぼっちの子どもたちが安心して元気になれる居場所を地域につくりたいという住
民の取り組みを通じて、富田小学校、第四中学校の生徒さん、子ども食堂に関わったみなさん、学習支援教
室に通う子どもたちも登場しました。

4 「ひとりぼっちのいない町」 Part2

2017年に引き続き、12月から3月の約4カ月にわたって取材いただいていた「ただいま～と言える子どもたちの居場所づくり」の第2弾が2018年4月22日(日)午前10時5分～48分にNHK「課題解決ドキュメント ふるさとグングン!」として放映されました。スタジオ進行は幸重忠孝さん、関ジャニ∞の横山裕さん、ぺこ&りゅーちえるさん。



5 中学生が主人公となった取り組み



2017年は、富田地区の「ただいま～と言える子どもたちの居場所づくり」として、地域主体の動きを放映いただきました。

2018年は、その第2弾。高槻市立第四中学校の中学生がこどものひとりぼっちの課題を考える授業として地域のさまざまな場に参画する様子とそれを支える地域の大人の姿を放映いただきました。

6 地域・家庭・学校・行政・企業・大学・NPO など 30 を超える団体の皆様のご協力を

2018年放映において当法人はただいま食堂や実践報告会の主催、さらなる子どもの居場所づくりの動きや中学生が主人公となってまちの課題解決を行う際に地域内外の30を超える多職種さまざまな組織を微力ながらコーディネートさせて頂きました。



番組は NHK 地域アーカイブズのホームページからもご覧いただけます。

トピックス -2

政府（内閣府）広報において放映されました！

政府（内閣府）広報番組「子どもたちの未来のために」
～地域に根ざす支援の現場～



1 多セクター協働による包括支援

内閣府からご依頼をいただき、2021年7月に当法人の子どもの居場所づくり事業の一つである「学習支援事業わんぴーす」および「フードパントリー」等についてテレビ朝日映像株式会社に取材いただきました。その様子が内閣府特番としてこの度、放映されました。

2 子どもたちの未来のために

コロナ禍で孤立が進む今。子どもたちの暮らしと学びを支える草の根活動が全国に広がっていると言います。そこで、つるの剛士がその支援の現場を訪ねます。

東京都豊島区『いけいけ子ども食堂』の活動と人々の想いを取材。また、板橋区『地域リビング プラスワン』で行われているのは、『おうちごはん』という取り組み。さらに「学び」に対する活動について探るため、大阪府高槻市富田町の『コミュニティースペースNikoNiko』へ。子どもたちを支える活動を通し、日本の未来を見つめます。



(番組公式ホームページより)

3 子どもたちを支える包括支援

取材では、タレントのつるの剛士さんが富田地区に来られ、地域に根ざす支援の現場として行政、大学、学校、企業、民間の連携による子どもたちの包括支援をテーマに取材いただきました。



トピックス-3

NHK Eテレバリバラ「水平社 100年」に出演しました！



全国水平社創立100周年に合わせ制作されたNHK Eテレバリバラ「水平社100年」が2022年3月3日、10日に放映され、当法人事務局長が出演しました。

- 水平社宣言100年①
「人間は尊敬すべきものだ」
- 水平社宣言100年②

1 「このまちに生まれてよかった」 そう思えるまち

今回の出演では、まちづくりを通していかにして部落差別をはじめ様々な社会課題を解決し次世代の子ども達に「このまちって素敵」「ここに生まれてよかった」と思えるまちをつくってゆけるのか（展望）を短い時間ながらも語りました。

2 「人の世に熱あれ 人間に光あれ」

「過酷な部落差別があたりまえだった100年前に誕生した水平社宣言。人間は同情や哀れみの対象ではなく、尊敬すべき存在だと訴えた宣言の理念は、いまでも輝きを失っていない。番組では水平社誕生の歴史を通して、宣言の意義を考える。スタジオには被差別部落出身者など当事者が大集合。当事者が声をあげる意義・支えることの大切さ、「自分を好きになること」など、理不尽な壁にぶつかっているすべての人たちに熱と光を届ける！」（番組ホームページより）

○番組公式HP

<https://www.nhk.jp/p/baribara/ts/8Q416M6Q79/episode/te/KNX4361X2K/>

トピックス-4

NHK かんさい熱視線 / NHK 青森あっぷるワイドにて放映

当法人が高槻市から受託している「高槻市子どもみまもり・つながり訪問事業」が2023年7月1日（金）の午後7時半からのNHK「かんさい熱視線」で放映されました。

「検証・神戸6歳児男児遺棄事件 なぜ命を救えなかったのか」のタイトルで前半は神戸市西区の男児虐待死事件を掘り下げ。

神戸市子ども家庭局への取材のほか、「過去の教訓から虐待を見逃さない体制強化」に取り組んだ千葉県野田市での取り組み紹介に続き、「全戸訪問で事前にリスク把握に努める」高槻市の「子どもみまもり・つながり訪問事業」をご紹介します。

また、2024年3月にはNHK「青森あっぷるワイド」で「未就園児の虐待を防ぐには」をテーマに同事業を取材・放映いただきました。



トピックス-5

全国に発信し他地域の課題解決の一助に

私たちが願っているのはこの地域でつくる支援の仕組みが他地域の課題解決の一助になることです。この間、様々な場面でのご紹介をはじめ光栄な賞などをいただいています。これらを通じて微力ながら全国に発信を行っていきたいと考えています。

1 日本地域福祉学会「地域福祉優秀実践賞」を受賞

この度、タウンスペースWAKWAKの実践が光栄にも日本地域福祉学会が行われている「地域福祉優秀実践賞」を受賞させていただきました。

この賞は2004年度に地域福祉の優れた実践を顕彰するために設置された賞で今回で第21回目となります。日ごろ大変お世話になっている加納恵子先生（関西大学）よりご推薦いただき受賞する運びとなりました。

2024年6月に開催される日本地域福祉学会第38回大会（東京大会）の授賞式に出席させていただき、その後報告会にて実践報告させていただきます。

このような光栄な賞をいただき感謝申し上げます



2 関西大学人権問題研究室紀要論文に実践を掲載

これまでの富田地区および高槻市域の実践について、「高槻市富田地区包摂型のまちづくり-子どもの居場所づくり事業を中心に」、コミュニティ再生事業の取り組みは、「多セクターとの共創による包摂型コミュニティ生成」、市域全域を対象とした取り組みは「居場所の包括連携によるモデル地域づくりに向けたアクションリサーチ」としてそれぞれまとめています。インターネットでもご覧いただけますのでぜひご覧ください。



3 『子どもと家庭を包み込む地域づくり』 発刊

京都女子大学の谷川至孝先生、岩槻知也先生からお声がけいただき、それぞれ大津「子どもソーシャルワークセンター」理事長幸重忠孝さんや京都「山科醍醐子どもの広場」代表理事村井拓哉さん、「沖縄ももやま子ども食堂」理事長鈴木友一郎さんなどとともにタウンスペースWAKWAKにおける富田地区の子どもの居場所づくりについて執筆させていただきました。

『子どもと家庭を包み込む地域づくり-教育と福祉のホリスティック



4 『ひとりぼっちのいない町をつくる』 発刊

富田地区及び高槻市域全域を対象とした取り組みを実践書としてまとめ明石書店から出版しました。

解題には志水宏吉（日本教育社会学会会長）、コラムとして学識者はもとより地域関係者、学校関係者、NPO関係者などさまざまな方々から寄稿いただいております。

『ひとりぼっちのいない町を作る-貧困・教育格差に取り組む大阪・高槻富田の実践に学ぶ』明石書店



5 多セクターとの共創の活動に対し 大阪大学大学院「独創的教育研究活動賞」を2度にわたり受賞

2020年は、多セクターとの共創による「コミュニティ再生事業」の取り組みが大阪大学国際共創大学院による「独創的教育研究活動賞」（「多セクターとの共創による新たな多文化コミュニティづくりによる共創知の生成」）を受賞。

2021年は高槻市域の取り組みに対し、「多セクターの共創による社会的不利を抱える家庭の要支援状況の可視化によるソーシャルアクション」を受賞しました。

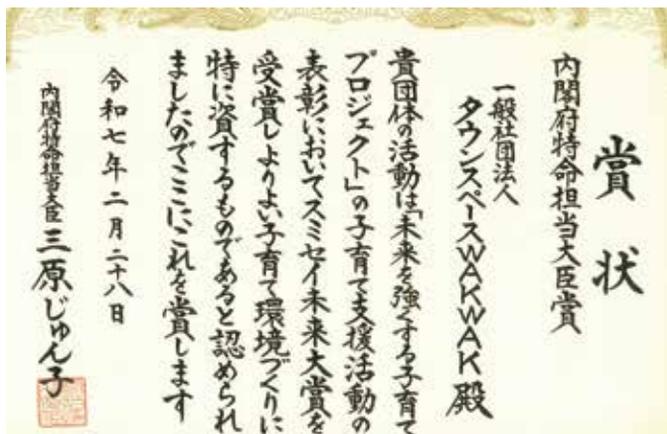


6 スミセイ子育て支援表彰「内閣府特命担当大臣賞」受賞

2025年2月28日、東京国際フォーラム会館で開催された住友生命さまの子育て支援活動表彰式において栄えある大賞・内閣府特命担当大臣賞を受賞させていただきました。選考委員のみなさまからは「自分達独自の活動に加えて、まちづくりや地域全体の生活支援など幅広く取りくんでいる点やネットワーク形成を高く評価させて頂いた」との過分なコメントも頂き、三原順子・内閣府（子ども政策等）特命担当大臣名の表彰状、住友生命さまより盾を贈呈頂きました。



3月9日にはそのご報告に高槻市長に表敬訪問をさせて頂きました。



7 国会議員によるオンライン視察・ヒアリングをお受けしました

2022年2月9日(水)午後5時15分より超党派の国会議員で構成されている「休眠預金等活用推進銀連盟（会長：加藤勝信衆議院議員/前官房長官）」による視察・ヒアリングを受けさせていただきました。

視察・ヒアリングは衆議院議員会館会議室とZOOMをつないでのオンライン形式。視察・ヒアリングを受けさせていただいたのは、タウンスペースWAKWAKを含む関西エリア6団体です。

ヒアリングでは各団体から助成事業についての概要説明の後、出席国会議員からの質疑応答形式が進められ、議員連盟からは約30名の衆参国会議員が参加いただきました。



8 厚生労働省・子ども家庭庁を通じた実践報告

2023年5月18日（木）は、認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえさんからご依頼をいただき、厚労省・子ども家庭庁の方々へ高槻市における「厚労省ひとり親等の子どもの食事等支援事業」の実践について報告。

2025年3月5日（水）は、同じくむすびえさん主催の「こども家庭庁支援対象児童等見守り強化事業・オンラインセミナー」に登壇。全国の市町村や社協さんなど約200名ほどのの方々にご参加。

この間、高槻市における官民連携による包摂ネットワークの構築について報告いただく機会をたくさんいただいております。市町村レベルで好事例を生み出し全国へ積極的に発信したいと思っております。



支援の呼びかけ 寄付の方法

ご寄付のお願い
活動へのご支援を
お願いいたします。

WAKWAK サポーターになる / 活動を応援する

今社会的に不利を抱えている人だけでなく、そうではない人も子どもから高齢者まで、誰もとりこぼさない地域が必要です。わたしたちは、富田での切れ目のない支援を目指したまちづくりと、高槻市域全体により多くの支援を届ける中間支援としての取り組みの2つのベクトルでさまざまな人たちとこの社会課題に向き合っています。この取り組みは富田をモデルに、高槻市全域、さらに全国へ広がります。

そんな「ひとりぼっちのいないまちづくり」を持続可能なものにするためにWAKWAKサポーターとして一緒に取り組みを応援してください。

サポーター制度の他、さまざまな応援方法をご用意しています。すべての応援についてご登録いただいた方には、年に2~3回発行しているWAKWAK通信等を送付し、活動内容をご報告させていただきます。

WAKWAK サポーターとして仲間になる！

WAKWAK サポーター（毎月）1,000 円～ / 月

WAKWAK サポーター（毎年）3,000 円～ / 年

支払い方法は、カード各種/Apple Pay/Google Payに対応しています。

※ 株式会社コングラントの寄付プラットフォームを利用しています。

▶お申込み方法：QRコードを読み込むと寄付決済ページが表示されます。

「寄付をする」をクリックするとご希望の金額から簡単に寄付することができます。



あなたのご寄付でできること

タウンスペースWAKWAKの事業はみなさまのあたたかいご寄付で支えられています。 ※下記は概算です。

富田エリア事業なら

3,000 円で



子どもの居場所
1回の運営の支援
ができます

5,000 円で



困窮家庭の緊急食
糧支援1世帯分の
支援ができます

10,000 円で



学びの支援受講生
1人1ヶ月分の受講
ができます

中間支援事業なら

10,000 円で



地域から広がる第三
の居場所アクション
ネットワーク会議を開
催できます

50,000 円で



緊急性の高い地域
へ1ヶ月分の食支
援ができます

100,000 円で



市内4か所の子ども
食堂等へ1回分の
デザートを提供で
きます

そのほか、さまざまな応援方法

01 「今を支える」寄付をする！

・タウンスペースWAKWAKへの応援 1,000円～

▶お申し込み方法

■クレジットカードの場合

支払い方法は、カード各種/Apple Pay/Google Payに対応しています。

※ 株式会社コングラントの寄付プラットフォームを利用しています。



QRコードを読み込むと寄付決済ページが表示されます。

「寄付をする」をクリックするとご希望の金額から簡単に寄付することができます。

■銀行振込の場合

下記の口座までお願いいたします。

銀行名 北おおさか信用金庫 富田支店

種別 普通口座

口座番号 0554063

名義人 一般社団法人タウンスペースWAKWAK 代表理事 岡本茂

お振り込み後、お手数ですが、①住所 ②お名前 ③活動報告送付のご希望 ④領収書のご希望を下記のメールアドレスまでご連絡ください。

■WAKWAK事務所へ直接の場合

タウンスペースWAKWAKへご持参ください。

〒569-0814 大阪府高槻市富田町2丁目13-8 ハイツ白菊1F

02 ボランティアとして活動に参加する！

参加を希望する活動や、参加しようと思った理由とともに以下のメールアドレスまでご連絡ください。

03 食材や備品の寄付をする！

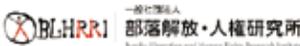
社会貢献活動として支援を届けたいと検討されている法人・企業のみなさま、活動に使える物品の支援を検討されるみなさまは以下のメールアドレスまでご連絡ください。

メールアドレス info@ts-wakwak.com

支えてくださった企業・団体 / 個人のみなさま

●企業・団体寄付（敬称略・順不同）

 <p>サンスター株式会社</p>	 <p>丸大食品株式会社</p>	 <p>株式会社ミートモリタ屋</p>
 <p>株式会社宮田運輸</p>	<p>イオンフードスタイル</p>	 <p>ジャトー株式会社</p>
 <p>大阪ガス株式会社</p>	<p>あなたの未来を強くする</p>  <p>住友生命株式会社</p>	 <p>TOA株式会社</p>
 <p>アサヒ飲料株式会社</p>	<p>フードバンク大阪</p>	 <p>阪急阪神 未来のゆめ・まちプロジェクト</p>
 <p>子供の未来応援基金</p>	 <p>WAM (社会福祉振興助成事業)</p>	 <p>一般財団法人 日本民間公益活動連携機構 (JANPIA)</p>

 <p>全国こども食堂支援センター・むすびえ</p>	 <p>ビューファイナンス</p>	 <p>日本財団</p>
 <p>こども夢基金</p>	 <p>大阪コミュニティ財団</p>	 <p>熊西地域振興財団</p>
 <p>赤い羽根共同募金</p>	 <p>大和証券財団</p>	 <p>楽天未来のつばさ</p>
 <p>大阪商工信用金庫</p>	 <p>太陽生命厚生財団</p>	 <p>大阪府人権協会</p>
 <p>部落解放人権研究所</p>	 <p>高槻市</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●個人として寄付をくださったみなさま ●正会員・賛助会員のみなさま ●WAKWAKサポーターのみなさま（月・年） ●活動を支えてくださった関係者のみなさま

代表理事メッセージ

ひと・暮らしを中心にすえたまちづくりの要とし



代表理事 岡本 茂

2012年4月にタウンスペースWAKWAKが一般社団法人として設立され早くも12年が経過しました。

設立趣旨でかかげた「すべての人に居場所と出番がある社会」「すべての人がSOSを発信でき、互いに支えられる社会」というミッションは、「ひとりぼっちのいないまちをつくる」という言葉に集約され、子どもから高齢者まで切れ目ない支援を目標に事業を展開しています。言い換えれば誰も排除しない「社会的包摂のまちづくり」です。

2021年度からはこれまでの富田地域事業に加え、新たな市域広域事業にもチャレンジしてきました。現在は、高槻市富田地区をエリアに多様な団体のプラットフォームの役割を担う「富田エリア事業」と「地域から広がる第三の居場所アクションネットワーク」をはじめとする高槻市域全域、大阪府域協働による「中間支援事業」の両輪での活動を進めています。

新たな取り組みとしてはコミュニティスペースNikoNikoを活用した「子どもの居場所づくり事業」や阪大生の持ち込み企画「わくわくワールド」、新型コロナ禍における物価高騰を背景とした「生活応援緊急食料支援」、また富寿栄住宅建替えに伴う新たな自治会設立、認定NPO法人全国子ども食堂支援センターむすびえの「むすびえ・こども食堂基金2023年度」を活用した「わくわく基金」の創設などがありました。

社会の変化に対応し今必要な人に必要な支援を届けるのは「民」であるからこそできる強みでもあります。反面、常に組織や財政基盤の確立に奔走する日々でもあります。

国が提唱する地域共生社会実現に向けた重層的支援体制構築「制度・分野ごとの『縦割り』や『支え手』『受け手』という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が『我が事』として参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えて『丸ごと』つながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会」モデルはまさにAKWAKの事業そのものです。

「ひと・暮らしを中心に据えたまちづくり」と「地域課題の解決を目指すまちづくり」相互のアプローチの要となるのがWAKWAKの組織・団体としての立ち位置ともいえます

この間、タウンスペースWAKWAKも多くの民間助成団体・市民団体、地域・学校・企業等多セクターのみなさんおよび多くの個人の方に支えていただいて今日に至っています。

こうした支援はWAKWAKの事業評価の指標であるともいえます。SDGsの理念でもある「ひとりも取り残さない」地域社会実現へみなさまの引きつづくご支援をお願い申し上げます。

あとかき

- 「動く」というのはそういうこと -

実践の中で様々な壁にあたる時、いつも助けられる言葉がある。

「それでも 1 ミリを進める」社会活動家湯浅誠さんの言葉。この言葉にこれまでどれほど救われたかわからない。そして、今も新たに『つながり続ける子ども食堂』（中央公論新社）で新型コロナ禍にステイホームが言われる中でも子どもたちや家庭の状況を見て活動する子ども食堂運営者の様子を描いた湯浅さんの言葉に助けられている。

「子ども食堂の人たちの中で、目立つことを狙って活動を継続した人は一人もいなかったと思う。みんな、止むに止まれぬ気持ちで、この状況下でも自分たちでできることは何かと考へ、できることに着手した。その結果、通報もされたが、支援を集めました。じっとしていれば、通報されることもなかったが、支援が集まることもなかっただろう。『動く』というのは、そういうことだ。」

新型コロナ禍で支援の必要性が広がるのを目の当たりにしながら、これまでは法人として地元富田地区を対象に支援のひな型を創ることに注力していた。けれど、「果たして困っているのはうちの校区の子ども達だけなのか?」、そう自らの心に深く問いかけた時、様々な社会的不利を抱える子ども達に支援が必要な状況が切迫して生まれている状況が浮かび上がってきた。そこから人生そのものに深くコミットし、そこで得たインスピレーションをもとに事業の「画」（事業計画、財源、実施体制、スケジュール等）を描いた。そして、その画（むすびえ休眠預金事業「居場所の包括連携によるモデル地域づくり全国」は 2021 年度に採択をいただき、これまでの法人のコンセプトも体制も対象範囲もすべて組み替える決断をし支援対象範囲を高槻市域全域に拡大した。そこで描いた画は、子ども分野を軸に据えた分野を超えた連携であり官民が協働する全国モデルづくりだった。そして、2024 年度は「子どもの未来応援ネットワーク事業」の助成を受けさらなる支援の裾野を広げることができた。

コロナ禍であえて活動を生み出すのは試行錯誤の連続であり、ここには書けない壁となることもたくさんあった。きっとこれからもある。ただ、社会を変えていくために「動く」というのはまさにそういうことなのだと思う。

そして、その思いに賛同してくださる人たちにはどれほど助けられ、支えられたかわからない。市域全域を対象として発足したネットワークは 2025 年 2 月時点で 86 団体となり、NPO や市民活動はもとより企業による支援、行政や社協との協働による支援、医療関係からの支援、浄土真宗をはじめとする宗教界からの支援など多岐にわたり支援の裾野も徐々に広がってきた。当法人単独では到底できないことがセクターを超えた多くの方々のお力添えとご協力により支援が広がりがつつある。

ある印象的な言葉がある。当法人の市域全域の事業に携わるボランティア研修で、あるボランティアさんが分かち合ってくれた言葉。事業の総括をする中で、「この活動のあなたにとってのやりがいは?」という問いに「自分が今手探りで行っているこの小さな動きが PDCA をまわして全国へと広がり、本当に困っている家庭への助けにつながります様に・・・と考へながら活動していました。」という言葉。心が震え、じんときた。

この実践を行う決断をしたとき、この地で子どもの貧困をはじめとする課題解決のための支援のひな型をつくりそれを全国へ発信し全国のフロントランナー実践に押し上げる、そのビジョンを掲げ走り始めた。それは、ここでの実践が市域全域の社会的不利を抱える子どもたちを含めすべての子ども達に届くことと同時にその実践を通じて得られたエッセンスが日本全国に広がることで、より多くの人たちに届けばとの願いそのものだった。

微力ながら重ねた実践があなたやあなたにつながる人たちのもとにも届くことを願って・・・

2025 年 3 月 31 日

一般社団法人タウンスペース WAKWAK

業務執行理事兼事務局長 岡本介介

WAKWAK ができるまで

- 新しい福祉のまちづくり「受ける福祉から担う福祉・共に創る福祉」-

- 1994. 6 「子ども・女性・高齢者・障がい者の人権ネットワーク」を設立
- 2001. 2 高槻富田地域で「新しい福祉のまちづくりプロジェクト」の結成
(障がい者施設づくり、高齢者・障がい者生きがい事業団、住民参加・在宅サービスの各プロジェクトのたちあげ)
- 2001. 9 社会福祉法人つながり設立準備会結成
(1700万円を目標に施設賛同基金に取り組み、住民参加の施設づくりのためのワークショップを計10回開催)
- 2003. 4 高槻富田地域に知的障がい者通所支援施設「サニースポット」(定員50名)が開設

- 地域の再生とまちづくりへの新たな歩み -

- 2006. 6 富田まち・くらしづくりネットワーク結成
(地域一斉清掃・祭り・盆踊りの復活によるコミュニティの再生、富寿栄連合自治会・老人会の再建、富田共同浴場ひかり湯のコミュニティ活用)

- 新たな福祉と人権・協働のまちづくり事業構想に着手 -

- 2010. 9 タウンスペース WAKWAK 事務所開設
- 2011. 12 法人取得へ設立準備会
- 2012. 2 設立総会と一般社団法人認証取得
- 2012. 3 一般社団法人タウンスペース WAKWAK 設立記念シンポジウム開催
- 2012. 4 新たな福祉と人権・協働のまちづくり事業がスタート

WAKWAK の事業展開

- 新たな福祉と協働のまちづくり事業 -

- 2012. 4 障がいのあるないの垣根を超えるボーダレスアート事業開始
地域福祉ランドデザイン事業スタート
- 2014 学習支援わんぴーすのスタート

- 社会的企業としての包摂型のまちづくり事業 -

- 2017. 1 事務局強化(新事務局長)と社会的企業として包摂型のまちづくりのスタート
- 2017. 4 「ただいま～と言える子どもの居場所づくり事業」(わくわく食堂・ただいま食堂)スタート
「社会的養護の子どもたちのバックアップ事業」前身の取り組みの引き継ぎとしてスタート
- 2018. 5 行政の受託に頼らない社会的企業の仕組の確立

- 法人役員体制の強化と新理事(学識経験者)の就任 -

- 2018. 6 大阪北部地震の発災と災害支援の取り組み
- 2019. 7 未来にわたり住み続けたい町「コミュニティ再生事業」の本格着手スタート
- 2021. 6 居場所の包括連携によるモデルづくり事業(全国)スタート

- 事業体と中間支援の両輪 -

- 2024. 4 富田エリア(ローカル)、市域エリア(インターメディアリー)の両輪での活動本格スタート

制作：一般社団法人タウンスペース WAKWAK

デザイン・装丁：MURAKOSHI

価格 1000 円

この収益はすべて子どもの居場所づくり事業へと大切にさせていただきます。

○本事業は「子どもの未来応援基金」の助成により作成いたしました。



2025 年3月31日発行

発行 // 一般社団法人タウンスペース WAKWAK 〒569-0814 高槻市富田町2丁目 13-8 ハイツ白菊 1F

TEL&FAX 072-693-9005 E-mail info@ts-wakwak.com URL <https://ts-wakwak.com/>